昭和七年六月上旋起業

自娯寄録

六

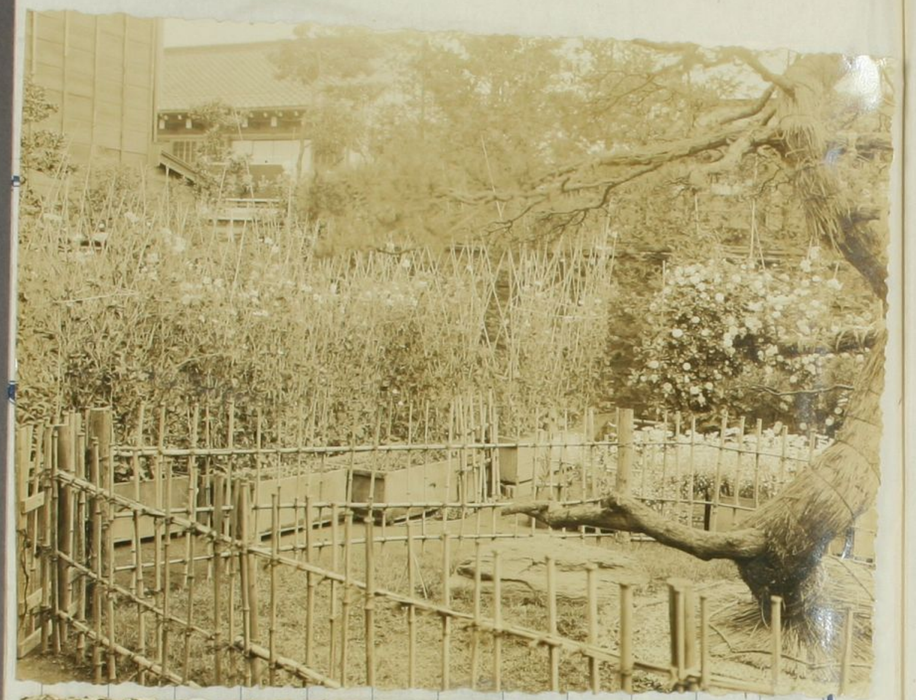
特別
14
1919
442

176707

自嘆録 六

昭和七年六月上浣起筆

○眼が見えなくなる事がやゝと聞くに及ぶ。雷鳴や雑音に困しめられ、政況の変、社会の変、実業の変、怒嗟の変、侍女の変、次々に変化が不断の苦しきを今の此際、僅かに心化を清ふする事の庭園の景を為す係と、前園栽の多くの西洋花ひあるも女兒が花の栽培を趣味とするのみ。マウ井トピイや紅白のバラや、千歳の春、マーガレットや今の花の集りで、いくら切つても切りもなきりきんそうのみ。切りもなきりきんそうのみ。ンダンに咲き乱れるものる。後園のごとき後つきの



よいこと勿論にて、前記のコントラストに如何なる妙を発揮するかを撰び、香氣の如くに鼻を撲つ、都門に住む人々に「仙境」を与へさせる風致を、浴するのみ、人公の仕合せなるかな、身あり芳花徳、心宜菓実香と共に、樹木や花卉や身心を洞ちしもあるに、岩ばかり効あるや、老来友とするこのみ、年来の道に、吾人の歌心、何地か蓮葉ならざるも、吾人の高を非常洞を以もて、左右相去る事を、が此等前載の花洗也

六月一日記

○帝国図書館に新設の自動複写の器に就て前号記し置きしが、去る其の図を収めおく、図書の複写のため 洞阪の巡也

模原製

一般彙報

帝國圖書館の自働複寫裝置　帝國圖書館では今回愈々獨逸シーメンス・シュッケルト電氣株式會社から自働複寫裝置（Reproduktive Automat）を購入設備せられた。同裝置は、種板なしに機械内でポヂテイヴに燒付けられ、僅か十分間で自働的に機械から送り出されると云ふ極めて精巧なもので、從來のフォトスタットがネガテイヴに出るのに反して、本裝置はポヂテイヴに出ると云ふのが特徴である。因に同館では左の如き規定に從つて去る五月一日から一般の希望に應じてゐる。

帝國圖書館圖書撮影規則

第一條　本館の圖書を撮影せむとする者は左の書式（略）に依り願書を差出し許可を受くへし

第二條　自働複寫裝置に依る本館の撮影は本館所藏に非さる圖書に付ても其の請求に應することあるへし

前項の撮影を求むる者は左の書式（略）に依り願書を差出すへし但し撮影圖書出願者の所有に非さるときは其の所有者の承諾證を添附することを要す

第三條　撮影手數料は左の三種（第三種略）とし撮影願書と共に之を納入すへし

第一種　本館の圖書を自働複寫裝置に依り撮影する場合

寫眞種別	被寫物種別	一般圖書	卷物、新聞其ノ他所定ノ貴重圖書
小（長二一〇ミリメートル 幅一四八ミリメートル）一枚		五拾錢	七拾錢
大（長二九七ミリメートル 幅二一〇ミリメートル）一枚		七拾錢	壹圓

第二種　本館所藏に非さる圖書を自働複寫裝置に依り撮影する場合

寫眞小（長二一〇ミリメートル 巾一四八ミリメートル）一枚四拾錢

寫眞大（長二九七ミリメートル 巾二一〇ミリメートル）一枚六拾錢

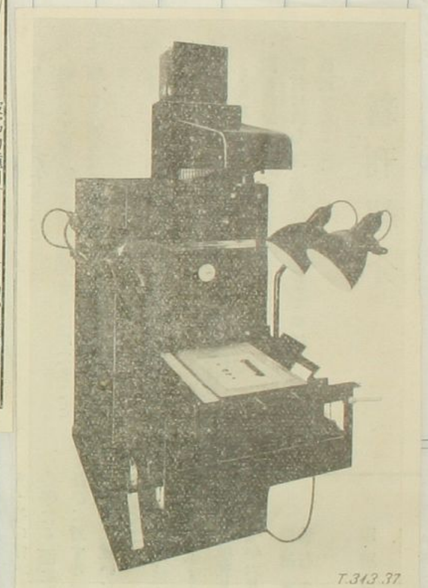
圖書一冊に付一時に寫眞多數を撮影する場合は左表に依り撮影手數料を減額す

寫眞枚（點）數	減額率
十枚（點）以上五十枚（點）未滿	一割
五十枚（點）以上百枚（點）未滿	二割
百枚（點）以上	三割

撮影は寫眞一枚に付目的物一箇に限る

一點とは寫眞原版一枚を指す

自働複寫裝置に依り撮影し得へき被寫物は長さ四二〇ミリメートル巾二九七ミリメートルを最大限とす



自働複寫裝置

○近刊の新佐「國者」の紙生の數字が擧げてあるが、大略事實と大差なきものと、數字から紙生を見るも一無である。先づ紙生と名つける地区は東は三十間堀川、西は外濠、北は京橋、南は新橋を已切りとれ二十三ヶ所の區域を正確、想現後所名を裏面としても紙生と云ふ面積は實に十四萬三千二百六十坪ばかりである。

北の地價はどんなものかと云ふに、尾張町の四ツ角が坪六千円と云ふのが最高で、表通でも坪千円を下る所は稀である。紙生の地價は云はんとするから、紙生全体を全部買收するとなれば、ここに集ひ來る人の數は約一萬四五千と云はんとするから、他から毎日此の所へやビルデングが、其他

る日々入り込む動め人（男女の数が六萬五千人と云
へから定住者と会すると八萬と云う大数ひ、人口の各
商は数るべきことひあるる
紐育の人口の多くは女性ひある。定住者一萬四五千人
の内女が約七千九百人、こんな各デパートのレヨップ、
ガールが或人あるかと云ふまた、三紙の四百九十人、松坂
屋の六百人、松屋の六百三十人、カフエーの女給千
二百人、バーの女給四百人、計三千三百二十人と
なる。此の流れて歩く、スカートの短い美麗ガール
ステッキ、ガール、ストリート、ガール、和楽座歌
舞伎座、新富座、東京劇場等の内数くらこ
む女性を保ちると女性の数の更らに多くかいる。

紐育の高いと女の淵叢ひ、女多くが男性を恨まず
ものひとをすると紐育の実る大廣宴と云ふ
のひ。
紐育の女性の淵叢ひあるとのはる大資本の淵叢ひ
ある。大きなデパートが或のも出来ると云ふが昔小資商人
を座倒しもある。小資商人のいかは羽撃もどうも出
来ない。松屋などの大川橋ゆれこころは淋死状
態ひあるひが、或が微兵保険から家賃六十五
弟四ひビルディングを借りる時、人の注目の家
賃と呆れ人が今は平均一日の賃上高八百円と
云ふから、家賃の高ひとこと云ふもの昔一ヶ月と云つ
ひ。三紙の二幸商会から家賃三十五弟四ひ借

り受け、賃り上方が手始めの立番用、松浦侯の国元屋敷から家賃五十萬円で借り受け、手始めの一日の賃上方は七萬円、即ち此の三大デパートを為る筈だけでも七千三百萬円の売数と上る、デパートの威力は実に恐るべきものである。

○荒木十畝がシャムロから帰朝したのち、後の馳せ参ず前秋宮を催した。席上十畝の待遇をしたらしく、国王自身が夫人と四宮白秋の待遇をしたらしく、国王自身が倫敦長の流儀とをつとめ、シャムロ女王で日本語の理解があるまいと、十畝が「撥の帯」の意味を説明してみたと云ふが、あまりの高い価値の意いうのが八十歩の差もあれと云ふものの、全く国王が日本

複原制

を宮中に招き、宮の現つのれと云ふを見る。勿論男子は皇族や外国人や本邦人でも貴族以下の階級は絶対に手出しをする能力が無いのに、展覧会を開会中と云ふが、毎日四時から夜の八時まで。十畝は日本語を話す時どんな面白い笑ひ方の数味を投ずるかの楽しみつかり。和歌浦世代や美人画を撥の帯にしたのは笑ひ顧みるものなく変人と一歩も変人をつとめて来た。光乃、強に面白い気魂をひと持つのは、忽ち意食の言葉を変へ「ハセヲいかと云ふ事」で拍手喝采の注意を浴びて来たと云ふとのこと。十畝は国シャムロから附近の熱帯地を巡遊して帰朝した。その

旅中の風景に活動写真に出る人に教めんと二時間
飽き示さんとが、其地の光景に景色の趣味を投ぜん。
唯此大記元の殿堂が若しの文化を語るものがある
所とあるのと、自然そのまゝの光景がめに映する
一例を挙ると、舎蘇と人間がごつちやくちやの雑踏
してゐることである。ヒマラヤ山脈等登に就ては四
萬尺の四分の一、一萬尺の山脈まで出うけたと云ふ、朝の
四時汽車中一行の乗る乗り十人かりで無理押の上
ほせて、太陽の出る時僅うて山の或る方面を見たる過き
ない。太陽の上る時を外すと全体が清霧に覆いんで何の
見るいのだ、早者の光景がある。日の出て登攀の山路
を見ると心臓を寒からしむる危険の所でもあれば

複原制

○珍客チャーリーのチャップリンも終に日本を引上げた。日本人
が殺到して、ひらひら氣もあがかしやがれで、まるでの行動が新聞紙
で、一日の内に或る心機が転ずると見くる、日本をとう
見れば、折角獄道者が各地の祝りを約し此つて、まるで
主客めくいを出さず、唯く天プラルのみあこがれん
で、何らも此の伝物と云ふ者使ひあるのもおかしなの
此の折角面会を約して大養首相も横死して、こんな
も矢張さこれらしいが、あるかし北悲劇を家人と日新
る見れの八、後ゝ八らの上意びあつたとる。彼ん現者
わを宣部る詰めれ序ると悲劇の色をてさと見
と感慨が深かつたらしい。日本の政治家が雑と騒ん
で卑怯の事をセちへ日本精神を金科玉条として

おもしろい。彼の日本の劇をみてどう感じたか、日本のユモリスト常我の風と今とどうおもつたか、えん芸のことはいふまでもないが、日本見物の彼は、倉卒見学を任ぜられとはいへ彼の芸術は神秘なる天分があつたと思はれる。彼のえん技や芸能から、物語の舞台を通じて巧みに理解せしめることハサクラクラクラう。日本の俳優は、俳優として云へば一流と称せられ、掌のゆるす限り、彼の芸術家であるが、彼のような芸術家にも、無台をこそ野外のユモアを演ずるか、義務を離れて、義務が動いて出して、容易に御し得ることができないことが、今後始めて分得されたとのあらう

六月二日記

第二万四十七號　（第三種郵便物認可）

『日本を見ない』と臍を曲げた鐵道

接待事務官も知らぬ顔

◆◇チャーリーは度々かへる、あれほど来朝の時は歓迎をした鐵道の観光局は「お勝手に」とすまし込んで接待事務官波多さんまで見送りにも行かず、知らぬ顔、何が観光局をそうさせたか、チャプリンが折角日本へ来て日本を見ないといふことにあつたといふことにある

◆◇観光局では省賓として待遇しパスも出し特別車も出した、それはチャプリンを日本の風景の前に立たせて活動写真を撮影し大いに宣伝しようといふのにあつた、と

たく〜とたいき、非常な面持ち、犬養氏が射撃された十五日の間は血潮で汚れた畳だけ切抜かれてある

◆◇そこまで来ろとチャーリーは「お氣の毒だ」と、はいてゐた靴を脱いで手にさげる、當時の模様を説明される度に舌打ちや指をならしていかにもくやしさうに眉をよせ落胆を曇らす

日本の首相官邸は警備が不充分だ、このテロ横行時代、公の生

つたくガランとしてをり、雨戸が閉ざされてゐる、チャーリー急に首相はこんな暗い室で最期の悲劇を待つたのだらうかと感慨を漏らす、雨戸を開けると新緑の庭園「あゝ光り、立派な公園だ」とすつかり喜びざ〜テラスに出て、あの木がよいとか奈麗だとほめちぎる

◆◇最後に官邸、天井に黒くのこつた銃痕を見て、帝國ホテルに引目の廻るような忙しさで高野秘書お氣に入りのボーイ奥石君を連れて午後一時半自動車で横濱へ、フランの熱狂的見送りを受けて故國への旅へ

◆◇いよ〜出發前の正午になつてチャーリー、まだ天ぷらが食ひたいと自動車を飛ばして日本橋濱町花長に出かけた、日本の最後のみやげと、タラフクつめ込んでホテルに引き上げた

◆◇こゝで懇會のあひ間を見て別れに来た犬養健氏と握手を交はし

◆◇最後に官邸の合服の白髪の喜劇王と握手を交した、首相は流暢な英語で「馬鹿に醫國がお早いようですが日本をよく見て頂きたいですね」と見物したいのですが残念だとにパスポートが切れるのと、アメリカに急ぐ仕事を持つてゐるのでけふ出發します、首相はお忙しさうですがおひまがあればシンガポール付近のバリー島に旅行なさい、實に平和郷で政策の上にも教へられることがあ

つた銃痕を見て

御使

家も御代拜

下御使岡本事務官、皇太后下御使西邑事務官も參著

霊柩車・青山斎場に入る

（下＝斎場に於ける遺族（向つて左から嗣子義正君、たま子未亡人その他）

横原製

王劇喜！らなよさ

けふ船出を前に首相官邸でお説教

犬養翁最期の部屋に佇み『機關銃を設けなさい』

チャーリー君、一年半余の世界流浪の旅もパスポートの期限が迫り、ぼつ〳〵かの地に殘した仕事も氣にかゝるので急に歸國の決心、氣まぐれでせつかちだけが、思ひ立つ日が吉日と、二日午後二時横濱解纜の氷川丸で太平洋の波を越え世界漫遊の一篇を完了する、去月十四日神戸に上陸して廿日間の滯京中、爆彈事件一首相暗殺、政變、この日まぐるしい中で角力にカブキにテンプラにかれの敏感な藝術心には現代日本が如何に印象付けられたか、さらばチャーリー！、いつまでもニッポンを忘れないで！

首相官邸で　上は齋藤首相との會見（右首相、左チャーリー）下は犬養前首相の血を切りとつた幾、足だけ出てゐるのがチャーリー、坐つてゐるのは案内の三田吉

◆◇喜劇王チャーリー・チャプリン君、歸國の船出をけふ（二日）午後三時に控へ、どうしても強力内閣の新首相に敬意を表したいと二日午前十時見シドニーをホテルに殘してたゞ一人、永田町の首相官邸を訪れた、一隅小客間で齋藤首相と會見

◆◇モーニングの白髪首相と、眼の冷厳の白髪老紳士と堂々たる会見した、首相は流暢な英語で

「馬鹿に歸國がお早いようですが日本をよく見て頂きたいですね」と見物したいのですが絶交なたにパスポートが切れるのと、アメリカに急ぐ仕事を持つてゐるのでけふ出發します、首相はお忙しさうですがおりまがあれば、シンガポール付近のバリー島に旅行なさい、實に平和郷で政策の上にも教へられることがありますよ」

◆◇野人犬養首相と皮肉會談の一席を楽しみにしてゐたところがあの遭難、最期の室を弔ひたいと暴漢が侵入した地下道から日本家に歩を運んだ、當時暴漢が敷居つてそのまゝになつてゐる杉戸をがた〳〵とたゝき、彼は腰を屈め、犬養氏が射撃された十五畳の間は血潮で汚れた畳だけ切抜かれてある

◆◇そこまで來るとチャーリーは「お氣の毒だと、はいてゐた靴を脱いで手にさげる、當時の模様を説明される度に吾打ちや指をならしていかにもやしさうに眉をよせ著服を曇らす

日本の首相官邸は警備が不充分だ、このチロ橋行時代、公の生命を持つ人を守る方法を考へねばならない、先づアメリカの銀行のように天井や地下室に小室を設け、機關銃をそなへ「スパイの穴」から常に警戒することだ

◆◇チャーリー、警視總監以上の意見をはき、一同を煙にまく、空家になつたまゝの官邸は淋しい氣一つたくガランとしてをり、雨戸が閉ざされてゐる、チャーリー急に首相はこんな暗い室で最期の悪魔を待つたのだらうか

と驚愕を漏らす、雨戸を開けると新緑の際闘「あゝ光り、立派な公園だ」とすつかり喜びやさ〳〵テラスに出て、あの木がよいとか奇麗だとほめちぎる

◆◇最後に

夕刊
東京日日新聞
（二日發行）（明治二十五年五月八日第三種郵便物認可）昭和七年六月三日
TOKYO NICHI-NICHI SHIMBUN
（金曜日）（C）第二万四十七號
編輯兼印刷發行人 相馬基
大阪毎日新聞東京支店
麹町富士見町一丁目十一番地三號
東京日日新聞發行所

上海皇軍の護り故白川大將をけふ余榮

悲しき凱旋に、國民の涙をそゝつた故陸軍大將從二位勳一等功一級白川義則氏の遺骸は市外代々木大山の自邸で二夜を明かし二日午後一時から青山齋場で武藤大將を葬儀委員長に、眞崎、小磯兩中將を副委員長として神式による嚴かなる陸軍葬が行はれた

弔砲ひゞく中に永久の別れ

涙を誘ふ遺愛の品々

霊前に畏し勅使・御使

各宮家も御代拜

これよりさき、午前十一時代々木の自邸では氷川神社山口大敬正を迎へて出棺祭を執行、棺には大將遺愛の軍服、ヨッブや年來親しんだ煙草の朝日などをさめ、畏きあたりより賜はつた葡萄酒を注いだ後、十一時五十分家族一同よいよいよ

▽最後△の別れをなすべく悲しき棺の蓋を開けられた、令嗣義正君、たま子未亡人の順序にちつと大將の赤黒く日やけした顔を見まもつたまゝ聲を呑んだ、最後に默面した千代子、梅子の二人の女中さんも涙にくれた、正午邸前に整列する代々幡町在鄉軍人、青年團、西新井小學校生徒たちの人垣をわけて神官、霊柩車、喪主、近親、葬儀委員の順序に

▽葬列△は靜かに進み、農大前を通り渋谷驛を經て青山齋場に到着した午後一時ほど近衛歩兵第三聯隊營庭で野砲第一聯隊が發射する十九發の弔砲がたゝりひゞくと松田近衛第三聯隊長の指揮する一個聯隊の儀仗隊にまもられて葬儀は開始された、霊柩には聖上陛下、皇后陛下、皇太后陛下から賜はつた眞榊をはじめ朝野各方面からおくられたかず多い榊

▽花環△は所狹きまでに供へられてゐる、中に英、米、ソヴイエットなど各國駐在武官から贈られた花環が特に人目をひいてゐる、中央には今はなき故人の凛々しい軍服姿の寫眞を安置してあるのも悲しく訪るる人々の涙をそゝつた

午後一時廿分畏くも聖上陛下御差遣の久松侍從參著、續いて皇后陛下御使西邑事務官も參著、陛下御使岡本事務官、皇太后陛下御使西邑事務官も參著、

霊柩車・青山齋場に入る（下＝齋場に於ける遺族（向つて左から嗣子義正君、たま子未亡人その他）

愛ニ第六十二回帝國議會開院ノ際勅語ヲ賜フ在ヘキヲシテ優渥ナル勅語ヲ賜フ在等謹テ叡旨ヲ奉體シ慎而審議協賛ノ仕フ端シ以テ至厚ヲ答奉セムコトヲ期ス臣等遠恐懼ノ至ニ任ヘス謹テ奉合ス

二分間九内直線面二湧き出る
二十星種五

の直接に支配する統制経済、計画経済の誘を生じ、ファシ
ヨ化は必用悪であることは言はまでもない。要するに公
益経済である。全体経済の真髄は公益に奉仕するものであ
つて、所謂資本主義は儲けることが目的で、儲け得べき
事業は資本を投ぜぬ。儲け得んがためにもやる。理
科学の成果をも利用する。新式の機械をも利用する。儲けの
為めとあれば、国家の不幸である戦争をも賛美する。
戦争すら儲かるとあれば無いからである。彼等の眼中には
農民の窮迫もなく、労働者の失業もなく、儲かりさ
へすればよいのである。学者を教唆して儲けることを熱中する
結果、産業の進歩は著しいが、それが公益と資す
ることもあるかまたは寧ろ偶然の合致であつても資

榛原製

本主義の目的のため公益は無い。但し公益の為めにする
ことが儲けることと方便であれば公益を手段と
籍りることはある。全体資本主義が横暴を極める
ときは自由主義を取つたからといつて
北の主義は産業を発達させる為めにはよく相違ない。
経済自由主義を一概に排斥することは出来ないが併
し拘束するきは自由主義は他の自由をも損ひ、実害
を社会に流すものである。元よりも大資本が必ずしも破倒
的に少弱の素人を蹴倒してあるかを見よ、彼等は
強大な獨占力をも利用して有利事業を自家専
ハ龍中のものとしてある。かを見よ、彼等は政治
家と結托して法律を改廃してまでも自家の利益

を保護してあるかを見よ、殆ど国費の大部分が大資本家擁護と保護とに注されてあるかを見よ、中産階級が課税の重きを困しみてあるに課税は寧ろ大資本家に軽きを見よ、資本主義は国家のあらゆるものを犠牲として利益を図ることを云ふも決して誣言ではない。今から五十年前維新早々の資本家はどうかと見る。当時の国庫の窮乏の為め方策する所もあつた。然るに経済自由主義を極めて資本家が今の如く強大となつたは、政府の威力からである。資本家の威力の方が大となつて、資本家に対しても○の権が頭が上らぬ、彼等の為めに益々横暴を極めをる。今となつて経済自由主義の弊害を苦しむことの日本のみならず、米国もそうである。但し露伊の二国は既に統制経済を由り、公益本位に資本を統制しをる。かの露伊は個人主義を主脚とする社会主義を制り、露西は階級主義を基礎とする社会主義を制して、方は共に統制経済である。公益経済である。日本の国体は、露伊の如き社会主義は日本の国体と抵触することを許さぬ。国家社会主義は日本の国体と抵触するものである。そして経済の自由主義を制限して之れを公益的に統制するは、国家社会主義を則ら採るべきである。保し統制経済を実行するには、後藤さまの考慮

を要する。一概に他国を傷ふことは断じて不可のである。即ちあらゆる資本を国家に差くは公有とすることを、んが為めに任侠自由主義を全然排り去ることゝ、私権私産を全然滅却することゝ、すべての産業を官営とすることゝ、統制任侠を理想的に徹底的に行ふべき必要であるかもしれぬが、かゝることは日本を望まずして、変革であるべきである。任侠の基礎は自由主義を待たずして、私権私益も滅却してゐるべき、産業官営の不注侠も既に経験済みである。全体社会主義といふものは資本主義の横暴と横慢とを防ぐものであるから、極端に趨せず私益私権を飽くまで簡単に無視し過ぎた

遺憾がある、任侠自由主義が矢張り認めて保護を與へる必要がある。

但し拘束なき自由主義は其の極端に趨ると私益を偏重し、今日の姿を生じた。来たからは法律を以て公益と交換することゝなるべきである。

簡単に言へば資本主義は任侠的自由の長所を採り、社会主義からその目的を採つて、こゝに公益と私益の共通線を工夫し、それを組織的に保護する在る。

六月四日記

○余は女詩を低く長しと後詠詩を絶つ、詩を思へば前輩の詩を読む、桑頭常に詩集を置く思ずしも唐宋詩人を偏せず、自ら詩を思ふ時、人の詩を読む

特に意を含する七のあり、各人詩思動くも、眼高く手低く、到底前輩に及ばず、古人の詩を讀んで拙詩を作るの器を有く示に是れ一種活法也、左の数詩時感心のこの詠し且つ録して例を遺る、大和一思の朝、

秋晩游小唐山　春濤

行々似無路、忽得三戸村、暗々滴秋澗、殘照明空山、
蒼苔冷芝蘆、霊籟生耳痕、黄葉挟陳雨、衣袂
颯々寒、売店臨溪上、賣酒倚茅軒、樵子来却
擔、拂落肩頭雲、相揖問名姓、但道山中人

秋思　同上

風搖清今雨濤其、客心傷今秋氣悲、燈下減
蟲啾啾、秋深沈、葉落蘭琴

恵日山有感　一絲和尚

忍見前期古道場、僧堂於有坐禪床、通天橋上
殊多感、不為紅楓主夕陽

冬夜即事　同

雲風一夜骨將摧、起撥炉火已寂回、寒月侵
窗梅影度、自憐我更度花梅

松下納涼　同

松陰密密更相宜、三伏炎蒸總不知、悔我從来
用心拙、武田為月斫無枝

拾枯　同

屋後岩巒拱未下、盡待枝拾夕陽傾、我亦解
言枯者是、帰程便覚上肩輕

戒吟詩

大事因緣重似山、為僧不了又何顏、可憐近世聰明種、老却推敲五字間　同

旭莊

浦樹曉烟深、彷彿見漁屋、旭日未離山、殘燈猶煜煜、群草猶綠光、村兒初放牧、吹笛跨牛行、歸彩震宝谷、微風度長陂、纖纖嶺上綺、霞之綺穀、言地清冷晨、暫時忘三伏、前路猶迢遞、山重又水複、望雲思樹陰、今宵何處宿、

長明壹山

夜聽落葉聲、寒枕無燈、夢未成、風林蕭颯答、疑是風雨

榛原製

都雅并、黃物冊、楓共一彩

夜到漁家　同

江雲醸雪欲成花、罷釣歸来逐亂鴉、苦林蒹葭西岸路、暗聽、腥風一首過漁家

木曾道中　同

冷烟淡霧龍衣人、顏、取路湍流亂石間、千鳥淩風有餘力、無瑞龍上馬前山

信州道中　同

怪松奇竹西東面、四望無人路欲迷、草滿閑塘行不盡、風吹白雨野狐啼

山行　同

洗雨溪山四辛萬重、孤亭高枕白雲封、快風落

力巧拙、露出ち突第一峰、

雨泊赤石　　同

一葉扁舟宮の戎身、腥風吹面雨如塵、蛟龍死後無
詩客、雲鎖江山不示人

唐物　　星巖

海風吉月変秋、絡北絡南雨漸収、行盡海濱三
百曲、侍天峰壓月是唐物

題鋸山探一洞亭羅漢峯　　同

上人房

流舟萬丈剖芙蓉、寺在磽確茅茨重、捲地黒風
来海角、有時微雨変山容、三千世界帰孤掌、五
百仙人共一峯、恰得残雲扶腥氣、老僧夜降

榛原製

石澤龍

予人口に膾炙する詩を特に愛す、亦詩名の高き人に優セ
ず、但此我れ云へんとして云ふ能はざるものを巧妙に言ふ
もの、愛重措こざる所也、石録数詩の如きは力を
ん、詩人の用意の拘らざる也　　六月四の記

唐詩選、予は孫郎詩を好まず、艶体の
詩を好まず、高古味の詩を好まず、故事
典拠多い詩を好まず、清雅の多い詩
を好まず、美麗の句を衒ふ詩を好まず、格
調の低い詩を好まず、こんを余が詩の七不好
と云ふ。

余が左の如き詩を最も愛す、

白鹽赤甲天下雄、拔地突兀磨蒼穹、瀼西極
士撫長劍、宝有豪健無窮容、不令氣象少
淳淳、常恨天地無全功、今朝忽悟始歎息、
物當元在烟雨中、太陰殺氣模糊、元化
變態含宝藏、正如高材遇時見、平日乃
與常人同、安得朱樓百尺、看此疾雨吹
樓風

こん陸游の名山を叙する詩を、山を叙する中に
山を精写するの作を、此詩感慨を寫し、山の変
態の何如ら生ずと云し、時に山水の訣を論じ、
之人物の時を過ぐべからざるを見るべきなり此時、甚だ意味あ
り、結句すこぶる豪放鉄石侵すべからざる意氣あ

橋原製

り、予若し詩を作らば此詩の如くならんことを庶幾
す、

の今俗八一ゝ見葉ゝ金の名を印刷し、各刺面数
を高七寸、巾三寸、文字の印刷あり、千
隅ゝ印刷今此ゝ長のしるあるあさかしかるべし、然り
文字ハ宋板字ゝ如ゝ小ゝ字の様ゝ小ゝを忌む、
◎貝葉いもと刀筆を以つて文字を刻すゝ、
此の宋板文字ハ元から
刀筆の書ゝ似て、此屋
業を刺しゝが如く見
へて、調和無きゝあら
ず、と云ふ

市島謙吉

○フェッシズムの語言は古代伊太利語のFascesにてあるこれは権力と統束を徴象するもので木の枝の束五六の束を数十本長さ三尺位に切り、リボンのやうな布片で結ひこれを二つのびあつて、レクトンと云ふ役人がこんぜんとこれを捧持して国王、執政官、其他最高権者の側を主つて列る家と尾従するの習慣があつて紀つかことで多数者の統束を意味すると共に猶戦的権力を象徴するものでもある。

○今数年中原中学上級黒の町文行君から伝説の書体文書一冊を得たこれは初の後情で好しなる文書で享保十九年から元文三年にもる迄

標原製

物古色蒼然たる大型紙二百五十枚を綴りたる古冊也表書に元禄二年二冊の内の第一冊の第二冊の内の第一冊の第二冊の内の第一冊の第

癸未夫とファウレきを論じ、信ら時事に及ぶ事ハ
ファウレきに免ぜざるべからず、然れども理想の
アッシヨを今到底日本に行ハんハ難し、之れを行ハ
んとすると大なるモデヒナーションを要す、大資本
の運用に制限を加ふることハ仏蘭の山々と
論じ、中産階級を保護する為め、之れに課する租
を減じ、重税を大資本に課すべし、ファッシヨを
唱道する者ハ中産階級の彭々たるを云ふ。其ハ時
尚ほ就て一二の事を述べる、政友会ハ犬養の死後大
命の再び政友会に降らんことを期し、護憲
宣伝を為さんとし、宣伝ハ少くとも三十五箇所を
以て、軍閥の横暴を鳴さんとしたるが、若しこれを

為さば、軍閥の憤怒を買ひ其の保護を拒かんこ
とを恐れて終に撤布をなさざりき。又云く政
友会に於て給木を絶望多数が法載を戴くこと
就ては五十嵐男の金を童貞に撒きたり、而も
其金ハ鳩山の補達する所なり、鳩山が内お之に擬さ
んとする功を懐るとなす、軍閥の跳梁ハ驚く盛
んなるも荒木陸相の留任ハ軍閥の強待と極る。役
者ハ思へらく、荒木なんば融通がきく、他の施政
なる武官を陸相とせば、恐らく動きのつかぬ施措
をなさんもはかるべからずと、陸相が自由意思に反し
留任し、陸軍部内の強待に対すること、海
内の在る尾崎行雄が切腹まくしても和せさ

さい、軍隊の時殺を懐てもろうと、新潟戸の外四里
過ける所の赤田駅より
急行電車に一時間ばかりも乗れば厚木に達す、厚木は相模
川沿岸の驛也、相模川は多摩酒匂二川の中間を
ある川なり、茅ヶ崎を注ぐ、その下流を馬入河と云ふ
此迄来るは始めてなれども、沿道佳驛毫を惹くも
のなし、唯だ相模川は陸奥大なり、相模次ぐ四四三
郡と係心称せらるる日本三大川の一なり、川幅頗る廣
く四南の光景雄大なり、香魚多し、是も甚だ美
味す、昔の豪雨なれば水増しなる
なれども多摩川のごとく渉瀬なる、流を溯るに、船
頭二人綱を曳くに、河中四五間の長竿を以て

榛原製

鮎を釣るもの多く、手拭を前に一寸今を以
らせ綱を御し漁す、香魚高く風味未だ
らせんなり、天麩羅に揚げて喫すれば酒を飲
うる迄。船中まもなくこと三時間、只管
話頭百出、互ひに絶倒す、第四の一行和田板本太
田久保作茶林二人、竹内小林と余也、三時帰宅
き五時帰宅

六月廿日記

富士登山口
御殿場
芦ノ湖
長尾峠
乙女峠
不動尊
箱根温泉
弘法山
伊豆原
相模厚木
大秦野
新松田
小田原
酒匂川
相模川
國府津
茅ヶ崎
藤沢
江ノ島
龍窟
片瀬江ノ島
海水浴場
鎌倉
逗子
箱

大山
日向薬師
七沢
中津川渓谷
新宿
玉堂園
天主教會
成城學園
安電所
了願寺
下北園
世田谷中原
經堂
豪徳寺
松蔭神社
丸山教會
稲田堤ノ桜
稲田登戸
稲田多摩川
結江
新原町田
向丘遊園地
弘法ノ松
多摩川
大船
鎌倉
東神奈川
小田急片瀬江ノ島鎌倉駅ヨリ見タル江ノ島
遊園地内部

○今日測際麓底を探つて菊池晩香（三九郎）の舊
宅一席を得、鶏助の情と抵くず、愛に收む、晩香
大震災の後病死す、早稲田大学の發展未だ大
も燒人うるをだらずしも去る。北清早稲田附近を
も含めたる僅こうる廿四日墓を探ず、詩中に入るこの
何人をこんのようなるんや、大隈老侯の舊邸今早
稲田大学の有る情す、老侯の書斎老侯起臥の室
今尚ほ儀然存す、庭中に老侯夫人の銅像あり又
平大の印者もる故人を祠る招魂殿あり、北清此時と
入るべし、庭園亦都下名園の一なり、邊室の奇を
称して（庭園）及ばざるは何人ぞや、大隈老侯田邸の一隅と
雲を衝くの大倉庫は老侯を紀念するの大建築な

して大隈講堂と云ふ、こん亦知香の見るに及ぶさる
こんもの亦詩中に逸す一のらしきもの、板内建築
美を誇るものの一、図書館あり、亦演劇場物館あり、図
書館の新築も知香死後のものなる、演劇場物
館は沙翁の運命を撰しなるものなり、東洋唯一の
ものなり、北清山上詩中に逸するを得んや、図書館内に
小日本唯一の大壁畫あり、観山大観の合作なる俵屋明時
の図と云ふ、早稲田の名物と呼ぶべきものこんも亦日本の近代の名
尚ほ理工学の新百般の設備、二個不ともある事学校
北清も詩中に無る一のらしきもの、運動場の広の校舎
地こ連接するもの一、亦萩窪のあるもの一、後者は

三萬坪の大を誇るものなり、北巷ハ時早稲田の偉観也
爲んぞ之を詩題に置くを得んや、之を密する勉
秀麗なる後早稲田の風色ハ一変し、風景の中心ハ早
大を在り、都の西北に麗を列ねて巍然雄視するもの
ハ校の内外武蔵野の内に在り、他の諸景ハ之に比す
れハ言ふに足らざるもの多し、唯者北の雄姿を見す
して早く折く、其の移に對して悠然たらざるを得
ざる也

昭和七年六月七日 池

標原製

早稲田二十四景詩

菊池晩香

文明餘澤及田家　隘巷新開路八叉　士女翩翩如舞鶴
春風吹酒彩帘斜　（鶴巷春帘）

百花爛漫裂禽啼　風暖晴郊淡靄迷　碧帽紅冠爭喝采
鳶飛鶻落入評題　（諸校競技）

千歲池荒竹樹寞　迴廊何處送龍腥　征東士馬收殘骨
丹血化成春草青　（千歲荒池）

花笑柳眠烟水前　嬌枝低拂美人船　稲田東望春光麗
搖曳紅雲襯碧天　（江堤櫻雲）

落花啼鳥韶光老　勝地無人風浩浩　翠靄深籠目白臺
萬株新樹映豐草　（目白新樹）
父老荒唐傳口碑　金川已入昔人詩　茅茨無復獵歸客
花草蕭條掛雨絲　（金川花草）
斷續鐘聲送夕照　幽蹊誰掃落花紛　春風吹老宗三寺
片月光涵名士墳　（宗寺荒墳）
怪石龍盤擁老梧　苔花埋逕翠雲殼　牛神廟古無人賽
半夜空林鵑獨呼　（牛林鵑語）
野橋倒影倚浮萍　一水溶溶萬古青　霸主當年留戰馬
村童今日撲流螢　（駒留水螢）

巨流一道自西來　崖樹根搖石壁摧　飛鳥跳魚光歷亂
湍聲衝激逐奔雷　（關口奔湍）
林表嵯峨嶽勢危　石牀吹熱綠陰移　黃昏一片葉間月
偏引新涼到稻祠　（稻祠涼月）
城門日落午炎隨　遊客追涼度野陂　風露滿天星在水
觀姿橋上立多時　（姿橋星影）
新秋霽氣洗山川　碧落無雲曉色妍　怪見林端龍影黑
礫川巨廠造兵烟　（兵廠晴烟）
仙翁一去跡寥寥　當日遺吟騷思饒　朝士野人齊憶古
蕉庵秋雨濺深宵　（蕉庵夜雨）

柳營公子駕青驪　臘尾閑遊賞雪時　遡水流雲翻圖煖
寒郊蚤急電車馳　（馬場奔電）

黃楓紫菊映紅紗　甲第秋閑仙洞霞　別有溫風通密室
窮冬霜雪養春花　（隈邨珍卉）

春光未動帝王州　昨夜寒飈卷古丘　曉色微茫無樹影
六花繚亂赤城頭　（赤城飛雪）

文華日進國光揚　學舍南隣調武場　凍月影微天欲曙
胡笳吹落戶山霜　（戶山胡笳）

雪繁霜凡度三冬　不許書生殘夢慵　寒雀未呼窓尚暗
學堂先打曉天鐘　（學堂曉鐘）

朱殿高臨碧澗阿　仲秋尊例奏笙歌　神官蹇舌說靈驗
一紙黃符禳百魔　（八幡靈符）

聞昔將軍埋錦兜　地荒塚古草花稠　行人來弔秋風夕
星月無光蟲語愁　（兜塚秋草）

烟外微聞野寺鐘　盡情詩思此中鍾　霜林深淺斜陽影
一望高田寶繡重　（高田夕照）

閱盡沙場戎馬間　名莊新築在椿山　松間點染霜楓色
蜀錦吳綾光爛斑　（椿山霜葉）

節入孟冬風景幽　野溝水涸稻雲收　荒村落日歸禽外
閑見牧童騎老牛　（落合歸牛）

○昨日華族会館で開いた文明協会に於ては北京満蒙を視察して帰られた田中都吉（特命全権大使）を招いて一般の講演を聴いた。速記を傍らに田中氏本人の所見を述べたが、時局に関する態度で先ず指導的視察としても未曾有のものと称し一段落すると、満州国の三千万の民衆がある。田中の言葉を紹介すると、満州国の三千万の民衆がある。役者は四国家観念に基いて安身立命を営望してゐる。役者を善政を施すと云ふことは安身立命を得せしむることであつて、そうすることが日本の指導と種族するものであり、去んで役者の心を得ることが何等かの意義であつて、日鮮満を善政と云ふ。日本流の善政ではなく役者を投するものであるべきものである。理論や遠い未来のことは差措き、日本

榛原製

の現状を顧みるに、どうすればよいか、その方針の確立を要する。然るに其方針が甚だ曖昧であつて、支那人は疑惑の間を彷徨しもゐる。役者は朝鮮と満蒙を日本の領土と云ふ事を行つたやうに傾向に満蒙を日本の領土と云ふ事いかと疑つてゐる。環視の外国人も之を疑つてゐる。日本は領土慾が無いと云ふ事実を事実の上に現はし其外国の疑を解くことが大切である。満蒙四家が僅かに成立したと云ふと、直ちに百万の移民をなし得るやうに考へて、内地で騒ぎ立てる。新興国家の宣言と云へば有名な人物を集めてゐるが、犯罪の地位を落ちるものは日本人で、支那人は指導の下に在る。全体支那人は支配を美徳とする地位を非ず

ふものい無いのみ、あるに日本官吏の方が多くなりて来る。日本人い日本人と共に共に方が便利であるから、日本人を登庸するの無理ならい故、彼等から見ると紀綱も疑が生じて来る。彼等支那人が日本信頼もとするのい治安維持であるが、さて事件発生後と発生前とを比すると、治安ハ十倍も亂れてゐて何んとしても政治の紀綱の弛んでゐることが出来ぬ。

動の状態び支那人の信頼を失し得るであらうか、事実支那人が日本を軽んじてゐる。幸のことに世界の公論の張学良の舊に戻すことを是認しうるへ、こんが日本の仕合びあるけれども、日本の指導精神がハッキリしないと、怨嗟の聲い張学良に勢するよりも甚しくなるも知れない。ロシヤが大兵を集めて来ること就て種々の臆測もあるが、恐らくロシヤのは早晩日本が恐ろを出さんことを待ち受けて居るのであつぬ。

で、今直ちに動くことの思はぬ。日本の出征軍も注意して衝突を避けてゐるが、ロシヤの強的の如く日本は敗走すると出すこといなきか、台湾の如く土匪を鎮極する十年の歳月を要しなの廣漠なる土地に繰へす出没する馬賊と掃蕩することいなきか、容易び国家に勢し行かなまじ世界をするるもい恐らく日本の力ハ及ばぬ、宜しく早く四防と治安維持の為を日本の任務と限つて、之れを

力を集中することが有効であつて、中国の疑惑を解く
資こい道であるまいか。
全体九月十八日の事件の発生は、突然として、支那が条約
を犯したことから起つたかと見くるが、その実、アメリカ
義会の満洲の軍人と、政党を信ずる
外交を信ずる国家社会主義者と合流して計画的
事件が発生したのである。然る変態があるから、
根いろ〳〵深く、現在日本内地に不祥事の数多きも
のも、その延長と見なければならぬ。実に四海の最も大な
るものである。以上の田中の所説は私見を多くかくれ
ものである。前冊の記した事柳条湖の祝杯論と参
照すれば、一層合点を得ると思ふ。　六月八日記

榛原製

○自分は二十年以来、前星大の景徳に手紙をよくすることを
とを奨励し、そして一場の長演説を試みたことがある。杉山令夫
も文体奨励者の一人であつた。手紙雑誌社の主幹薬師
寺氏と早大の生の手紙の数多く入れたこともある。を
は自分が去年、前を先集してみた時のことである。
此時、こゝに早大の生の間を建てた書簡合かあ
つて、書簡を奨励した。ある、その幹事が、小生に書簡
と題しての講演をと話ひた。未だのひ、自分も勝手に
漫談をした。試みを議した。抑々何を談すべきか
書簡の就て知ることがいかに切つても切れない
こと、手紙漫談二十則とも題した。前年
英集から思ひ付いた事を語つてゐるべきか

○手紙教育　昔しの寺小屋で不完全な教育を施した時分も盛んに書を教へられ、手紙を書くことを大切なこととしたり、手本を重ねて手紙の模範を教科書とし、活版往来などの、古状揃などが編んである。共に手紙風な書いたものである。えんらう手紙を書くことが訓練されたといへぬが、兎に角寺小屋教育時分、手紙を以つて人の生活に最も欠く可からざるものとしたことがてうかがはる

○手紙文学　手紙は一人の對手に対して数人に對し、或る用を弁じ、情思を交換するものである、その書き方の巧拙によると情思が通じ難かったり、或は立ち法とする。手紙で知って人を納得

榛原製

させることもある。単に事務的の手紙であっても、書き方の巧拙がある。況んや情思を通じ、お手の感情を訴へるに於ては、事務の手紙と趣を異つて、レトリックも要る。且つお手の階級に伴つては和漢の教養も要する。況んや世態と共に、変化和歌の書きぶりがあるのみ、決して家庭のものでなく、手紙の巧拙は一科の文学である。そして可なり高い文学に属する。日本は昔も今も一個人の手紙も多く集めて、えんが立派な後ろあるようでもあるのも、えんが立派なことを示す一例である

○手紙の書式　之に就ては古来幾多の変遷がある。

今古文書と唱へて、こん報つゝみる手紙などゝいふ大体書きぶりが、開書ひあくて、極めて大安を書き、委曲いろ手紙の類の帯者の口上を譲るものが多い。公けゝ関する手紙は概ね此類ひある。今は電信があり電信があり、はがき（葉書）の用いあり、郵便、電話を利用すれば、手紙を書かし得る場合が多くなりて、保し此等は日用常面の用を弁ずるものひあるも、コミ入つたことをいふとなると、忘れ難き情思を交換せんとすることなると、今日ひも手紙は尤も大切なるものひ、第一手下が主身の階梯となるべき、生涯幸不幸の禍福ともなる。

○信書に対する公徳　昔しは今の如く郵便制度かなく、消息を百里を遠くして届ける外は無つたの、飛脚は後慢ひあつたが、あまるの間あかなく、手紙の交換が行はれた。随分金銭を出すゝ和しこんひこよりあつたが、是が無きとき飛先の届いた。楠南熊の東西海紀を渡んひ見ると、北海道に鶴の如き紀事がある。支那のごとき四ひい別庭人に手紙を托して意の生来るものひなるゝ、金銭の表しある手紙を切除危険が伴ふ、日本の第一開達が無つたのは、日本の海りひとまふとなるが、こんは元飛脚に信書の託する方法があるひなるひ、郵便制度の立派な成り

立つたのも一つは信書に対する公徳がある（の素）ことを（これ）
思はんか。勿論手紙の書き方を熟考つて五大力の三字（あんと）
をお織の家と書き、五大力菩薩祈るとこそやう
な迷信もあつたのである。

○書状と書状　手紙と書状とこの二つが、状と状と同じ（一通）する。自分は
るから、書状と書状とこの二つが、状と状と同じ（一通）する。自分は
学つた書状と書状と、状と状とは代はるとふて情
を書きを置いたらとかがある。起居の状を述るのも実
に情を述るあひあつて、清見（四）を通する本分は情
を述（する）する様りと云ふてよいの手紙の形式をさきく
あるみんな、情を述（する）する手紙が多大切ひ手紙の
大部分を占めるとあるく云んひある。特に説くまでも

標原制

なへか、野卑の例も取ると、若し婦人は情を毎の
手紙をめ（一）て毎春その情を寄せれ云を日の夜と
云ふ位の婦人の手紙が情を通（する）する。分る大切
あつれかい、当時の婦人が文章の学を入つて流
麗の文を書くことを習つれのひもとる。亦戯文
会ることをやつて見ひる文章を読ふれこと
[illegible]る。以上の中吹きひは伊勢の女市を海を
形式ひいあるが婦人が美を以を寄せれこあひある。

○代筆の手紙　情味を通（する）する文の巧妙を要するけん
も本一人傍仲の本人の筆が無ひ代筆こと云ふことも
る、若し手紙を云いろくの場合代筆がある。若し
の勢庭ひい、多くの場合代筆思も傍くまる宮廷が書

いたんを女房言葉とまちがえる武家ひも多くの場合
祐筆が書いた。これは地位の卑いものが親商を典へる
い制度から生じたものであるが大隈元侯の場
合自分で筆を執つたことがあり、地位の自分以上の
人を動かしてまで祐筆を置つた、これらは全く破格
の例である。

○家庭の手紙　見を持味の豊かなる手紙の存在と云
ふ家庭とあるべきもの。親子夫妻の詳らかなる手紙
ハこゝに存在するのであり、いくら
文章が拙いとも女流の手紙が存在するのハこゝである
まるが、実に多く特殊の情趣ひそむけれども家庭の
手紙の書ぶりである。即ち親から長く他郷の在ること

榛原製

か良人が久しく外国へ出ることあるとき場合ひとし
けれども往復かるゝ、さしてこの家庭の手紙ハ多くの場
合家庭の事を語り人の見ることを厭ふものの
かあるのみ。一見火中しようとするけれども実
ハ父祖の書簡ハ家庭に大切なるものの
であるがゆゑこの家庭の家の人の書いた手紙が
ちゝ性を他人へ出すのを苦痛に感ずるものを
[illegible]手紙は[illegible]のごとく家人の手紙
心ゆけて保存し[illegible]男子の手紙は他家に
[illegible]女流の手紙は[illegible]を尋ねても無い場
合がある。

○手紙の災厄　手紙も[illegible]命のごとく無い、一見用を弁

まんが重なる引裂かれた葉らくさ、えんぴつ火の跡のあるものハ多くハ人に伝ふる書封の保存を所望し一度用を済ませば必ず不要棄する。用捨箱などを置いて、不用と用あるものとを分り別ける。用あるものを保存する人もあるが、そうゆうもの多くなると反古を書くまた保存するのもあって、反古を出し終わの葉を人がかくくくい。随分いろくの事情に伝ふる手紙ハ葉てくくし、外内式部の手紙などハ城後の御果れから存ぜられたくさん出たが、連歌を惜んで当時焚き棄てたと今の僧侶の一番しハ存ずるまい。御機の煙滅を図るなんの焼き棄るものもある。昔しから日々の火中の葉らくく手紙ハ数多くあるが火中する随分惜しいものもあつたの報恩寺ハ近衛公爵家の菩提所家の菩提の所が保存されてあるから、あんなものを人車記を筆者（すれば）ならんと保存（残る）きるものがある。

○手紙の幸不幸　あるものハ字を保存せんと試るものハ無残な葉でもらくが、心無い人ハ、つてハ手紙のやうな反故ハ塵同前である。芭蕉の古簡がある方面の幸ひなる多く保存さんとんが後と板まひくれの光竟等の保存者が芭蕉と子弟の関係があつて、ひを尊崇する敬意も無き山の七末の片紙断簡と雖も葉する保存し数供をおんを天井に貼付すると例を此からてある、女人の名ハ

今思い出すのは、芭蕉の生活の著端の供給を百
数十人に過ぎない手紙だけ残されて来ることの味噌、米、野菜
果物、油、鰹節、紙、菓子、餅、豆の類、皆、自用を
弁ずるに過ぎない数である。中には、即吟の
何のあるのもあるが、大数の百も満たない。殆ど零
紙の保存されたのは全く心ある人の手の賜物だからの
ことである。大隈家に浮山の夫人手紙の保存さ
れたことの就ては、その別項で述べるが、尤も決して
手紙を保存する意のある人ばかりの但し夫人が
想ってあった為の手紙、皆を維新
以降の時代にも殆ど大切の記録が存じない。
心ある人、若くは古ぼけた人が

時々刻々多くの書簡を廃棄して出るか
実に惜んで余りあることだ。多くの使を保存せざる
る手紙と云へば、高貴の人の署名のあるもの、紙
業の人のもいとうる、用紙の義理ばかりの
ある外、通例の礼状、折角父母の形見保存
してあるものを、思ふ存分の手あき紙、屑でしかない女
人が所望の手あき紙、どこの
もあることだ。

○手紙の保存　私の手紙の保存を勧めることである。敢て
珍らしい手紙を買ひ集めて保存せよと云ふのでなく
い、自然自分の手元に来る手紙を、あの取捨と
かくても、ずのが保存すべしと云ふのである。珍らしい

書簡を集めて保存することは別流の趣味の
ものであるが、銘々の家に家宝として
のび之れを保存するのことは何人の所倒もうけ保存する時機
さへ来れば、それが他人の思ひ出の資料
となろう、故人の紀念ともなろう、ある事柄の考証ともなろう、交
誼の密なるは保存されてあるもの、トーキーは北の手紙であ
る、別して相南の地位を有し大事
な春意しに人などと家の中らの手紙は歴史料と
なるべきものもあるから、その保存を勧め度いものである
（昭和五年）

数年前大アルバムを拵へ置き、これを演劇博
物館に保存を托された。舊文豪と交遊の書簡とを分

交遊を物語る舊文豪の思想を窺ひ得る風貌の状
料である。自分の昨年東京帝国大学の授時代から
交つた学校方面の師友の書簡四百
ばかりをアルバムに張り込んで保存した。
故人の遺跡に関係の故人の遺跡に関係
つたものである。

○大隈家の書簡　大隈侯爵の亡妻夫人は自分を呼んで話る
ことは、自分は維新後から屋敷を家宝の七夕来て、各所から
の書簡を心がけて保存してある時代のものは
命令者の整理をさせてある。折角保存してあ
ればあるが、これが自然と世間に散逸することがあると
面白くない。いつそのこと焼却して仕舞ふと

標原製

来たるこのび、自分の前項の如く俳句論若干もあり、恰かも
其時光長の俳記係寡を思ひ立つに決ひもあるこのび、
部ろいて推し止め、貴が引受けも整理をし、巻を
整漢して永大木限家と係本一紙も散失しないやう
にするから、私のお任かせなさいとこゝろに、其日高持出
さんに手紙を見ると、実に其の分量の大きさに驚ろ
いた。内容十三四年頃迄の書簡は三傳記分類大文
保木戸とこゝに人別に分けられ、他に入つて
居り歴史中の人物の書簡の見が、大変邪カバンに
四つも五つもあり、未整理の各年の未簡は大風呂
敷に包まれて見が実に十の多きに及び、二十畳
もある大きな室が充塞の有様になるのに一驚

を喫した。の事も可なり手紙を寄せ集める道楽を
やめられないが、こんな手紙の海に深みとこといな
いもの、整理の容易ひらいことと思ひと共に一種の可
うさ愉快を覚へた。見から二週間ばかりの間
日数一枚取捨しもうくの書簡を濾つたが、維新以
前豪の手紙が十の八九を占めてゐるので、見を
読ちと完から驚き歴史中の人と成り化したと
ときに感がありて、毎日の長時間を費を全然意
を解る興味を感じた。見が一ト通り整理されて
見く巻を表装されたのは一二年の後であるが、四五
百巻の風雪書簡の大隈家と立派な右してゐるの
は此の次第に依るので、大隈光長の経歴を二分の係

記を書くと大なる参考となることは言ふまでもないが、

○手紙の廣低　八詐偽手紙の考察を行はんとするに、手紙に書畫値があるから廣低が盛んに行はんとする。維新の元勲などの手紙でも一紙百圓二百圓の價のあるものはいくらもある。價のあるだけ元勲の種々の手紙が市場に出て、見かけ詐家の手を轉轉してゐる。勿論これは廣低抱ひ易く、也うこれ沢の手紙なれば殆り廣低抱ひ易いが、自分ある例へば赤穂義士の手紙の廣低は元禄年時から行はれて、四十七士揃つたものが自分の知る範圍だけでも二三あるが、当時の紙墨を用ひて当時の出体で出へてあるから、一寸判別し難い趣がある。山陽や象山なども名彩があるが、其の手紙

榛原製

も真の價があるから、随分廣低がある。殊に山陽の手紙ばかりである。信州に象山の字なるものが廣低をすると空へ出れば、一寸真似を判し難い程である。自分の経験を語ると、象山の書は杉浦に無つて紀侍人の手紙の有名なものである。本は京都の尊攘堂とあるのだが、自分は廣低を立田氏が真と記るやうに出来てゐるが、同じ手紙が立六通あるから、廣低の長じて、古文書などを知人の手を成りを入が真実と識者に受取られてゐるのは決して少なくない

○後醍醐の宸翰　詐家の手紙の雨影を有する目的で

歴代の出きてるに目的いろ〳〵複製されいろ〳〵の書簡のあることゝ就ても一言を要する。極めて稀覯の高きる古簡を複製されたるを修史館で出版した史徴墨寶が有り、古い学者文人の書簡を（山陽書簡）複製して名家書簡の名で二十冊許のものがあり、山陽の書簡を複製したる帖が多く、山陽の書簡文を千有余）的も流宮の附したものがあり、馬琴の書簡を流宮本るしたものがあり、前坂大隈家の書簡の色々なものもコロタイプ版を附したり雪偉観がある。

若しから自分の尊崇する人の書簡を下寧を映写することも或る範圍を行はれ、自分の筆中に長曾畫山の遺）の簡を映写したものがある。近来

榛原製

八複製術が著（幸）して、光業版を附したものなど八真蹟と異別がつきまとはるゝ、ゆゝ複製物も書簡保存の一法と云へてよい。

○自分の経験を語る一　自分が一時多くの書簡を集めた経験に依ると、或る時代ハおのづから相通する脈があるやうに思はれる、文言を指す書体を指す、殊に門流まのおのづから一脈相通するものを見る例へば伊藤仁斎父子兄弟ハ伊藤脈が流れ、荻生茅山や山崎闇斎者等も其の系統の人々を集めて見ると、勿論そこに一脈の通ずるものがある、山陽一門も就て見ても亦可なりさる脈絡があつて、系統的に手紙を編集して見ると、そこ

に意味もあり興味もある。

○経験の二　交通不便なりし時代、電信も電信も郵便もなく手紙を托しても消息を信ずるに唯に飛脚の手紙のみ。当時、懇意同士は、一年数次互に往来を[illegible]報ずる位のものであつたから、実に対談することを希望し、書くことが或る範囲を行はれた。馬琴や京山が北斎雪旦の鈴木牧之に寄せた書簡の如き、一通十くらゐ迄もあるものあり、長くは終日を費し、しばしばくりかへしたるもの、長文にわたるもの、新聞紙の切抜ひも添へて送る事を、江戸の椿岳も書き送りたるもあり。田能村竹田があこがれの長崎の地に居た時、その旅中の消息から長崎の地

原製

業を細叙した手紙は子を元とした[illegible]の一文である。及ぶ細書である。大田南畝（蜀山人）が友用で長崎にゐた頃、長崎見物を江戸にある家弟に報じた書簡などは、保存さるべき価値の日誌へ元の心得もあつたらしく一定の用紙で出るもの。

委しいものもあるが、こんな位で交通不便のから生ずる手紙の一特徴とも云ふべきものあらう。

○経験の三　多くの手紙を寄せ集めて見ること、往々委業さんをうつす手紙がいくらも交つてゐる。見ハ味しと主流の書かんに比べ手紙でなく、用件も殆り主流をなすものが、見ハ却つて稀いものである。例へば工芸家の手紙などが第一例で、工芸家

まい諸科のいろく名人七■あつて、其の他沿革の、銘があり、若者ちゃもあるが、こんをおうてハ其の筆蹟の得難いものであるが、さて手紙ハ用を弁ずるあり、之を書かぬものであるから、手紙を集めると、芭蕉が初めて日に觸れる剣士の誰れ、■内の誰れ、陶工の誰れ、木工の誰れと云ふやうな陶冶名彫が其の外墨蹟、絵画等と共に多くの墨蹟ハ絵画に倣ハるるいが、斯る人の遺蹟ハ有り孫とすべきものと感じた。

○紀験の四　手紙を書くにおのづから形式があつて、公文ならハ其の形式を踏んでゐる公文なるも、其時代の形式に捕はれてゐるものが多い。徳川幼

横原制

前の手紙の陰に例のあるけれども、こんでもあるから、実の興味が蔑いつた興味のあるのハ形式を脱して自由奔放な書いたものである。何と云つても徳川中期■■■■■が共の有る潮と言ふ時である花燭燈の観がある、自分が芭蕉の舞台をこゝに定めたのも主初ハ盲目的に貴族間が多くなつてゐて、芭蕉が容易であるから北の正域内を捜ふ北の比が、後者なつて考へも趣味のものの北の時代と云ふと感じた、手紙の内容の趣味と新しい後者に於る手紙■の用愛の趣味的の工風をしたのも此頃の事。

給料切と云ふものゝ如きが、ひどく吟味された■陰つて書簡でも毒言迫が施されて、北高や廣重な

とが業を掃ふ、用箋

極彩色の種々の絵既に

印刷し、そんな好事家の家に使用されたり、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

が、口紅●サヤ型の用紙[illegible]男子[illegible]種々用

いられた。今の絵[illegible]

[illegible]

味を持ち百種程は今も売られてゐる。

○住所の上　昔は今の様な年月の不備は年月

を書くに不忠実であることの為めの用を兼ねる

某年とまで書くも及ばないやうなこと、手紙が既

[illegible]ものとすると、年賀の記入が必要であるが、多く

の年賀状はいろんな大きさ[illegible]何日とあるの

標原製

又は月まで略したものがあり、いつも手紙を扱ひ

とする時は誰んでも困むのは此不

備である。今日は同じ人に出すのに郵便

に托するのに、郵便局の押印は年月があるが

ら、[illegible]葉書[illegible]保証[illegible]

が、年を書くことは一向面倒もなくことに[illegible]

此の不備を補ふ習慣[illegible]を起したいものだ。

○住所の上　通常を変する手紙の場合

ずは時の然らざるも種種[illegible]必ず通ずるを出さ

きであるが、或は全く[illegible]通ずるを出さず

住所とのみ、業無性の為め思ひとゝまる故

御しやうしも、表信者とかゝる困らも

ことが苦しいからである。そこで自筆(なる)事を使す
方法が考出されたのハ、自分の手紙の末こ(なる)
る用の餘白を存することや、(なる)事を書かせ
る為め自分の手紙の行間を空けておくこ
とゝなどが起つて、多く手紙を寄せ集めて見る
と、五ツ位の行の間(なる)事を書いたものが
武通も書見さんる。いろ〳〵のことを列挙して
人の意見を問ふ手紙などゝ、日感とこの不
同意とゝ、或ハ日常単ニ意見を記すもの
もあるが、斯る場合ニ行間を空けて直ちニ(なる)
事をそこニ書かせることが最も便利である。
兎角書翰ニ新しい方式(なる)事を無くる時

榛原製

様の大切である。或る人ハ停滞した手紙の(なる)
を恭敬ニ着順を示して書く、そし
て自分ニ云ふまゝ来訪の客があるとすると早く
話切て来た人から面会するのが礼である、手紙の
(なる)ものも面倒であらば、(なる)べく簡単ニ
けが大切である。

○往復の心　手紙の内ニ極めて書きまくれ、ものがある概し
て用件の多い手紙の書きぶりハ、例へハ人の紹介を附
ふるものの手紙ハ三行や五行ひも書けるものが、見ハ
形式一倍のものゝ如きニも拘味が多く、情味を深くして相
手を動かすやうニ書くことハ餘程手紙ニ老熟の
人で無ければ出来がたい。人の不幸を弔ふ書状なども

旧式で紋切形の手紙を書くことは何人かもそうであるが、情味のあることは決して容易ではない。最悪の場合でも不の現底をあらわすくらいである。これも元来の人を待つ、目下の人へ出す程度の手紙が一つ二つ多い。大体の手紙は敬語を用ゐるものだが、敬語の全然ない手紙のみを書きまくるひものは、敬語も用ひず傲慢に書くと兎角傲慢らしくなる。敬語も用ひず傲慢らしくない手紙を書くことは困難のうちである。

大正天皇の皇太子時代或る御歌会の席上で或る歌の感想を求められたことがある。歌は不必要で常識的に新しい雪上の人の歌を不必要で常識的に新しい雪上の人の歌を

榛原製

の感じがしないお書き物があるものである。又女性の筆つくる書物が古くさい。今時の文体は男も女も口語体で書くから面倒いやうだが、難を云へば男女何の手紙だか分らぬ。特徴がない。

昔しは女人で美しい筆やさしく美人と紙屋で書く女の一体があつたのだ。その体で行くことは容易で無つた。多くの手紙に就て見ると、四方の人の筆跡人をとるうまい人が多くある。加茂真淵が門人の大坂御谷俳文子で寄せた書簡は常に書きまくる筆を花にしてあつたが、愛情が紙上に溢れ慈母を喜ばすまでもあつたがあんな風に書くことは全く大なる藝術であると思

ある。

何日と云ても大分獨逸の手紙の多くは山陽である、表別の人
筆跡が破歌体に誠するに山陽である、手紙が短く文言
が詩を書く、文言の歌のるんが漢文を挿む、誰れが漢
人でもテヤームさんの書こぬかある。形式を全く一蹴し
其人其時其書まハさん拙の書くかく、文を他と富
まることの絶筆に不一の拙である。彼れの手紙は生前
既に交渉の多くも珍重さんと一覧後棄てるとの
と云ふてゐる。随て寄山と残つてゐる、氏又祀で出版
し比山陽書簡集二冊に収めたるものでも千通以上あ
る。尚拙ても多くあるも相違ない、私が去る猶多
とあるは山陽の書簡である誠に結構である。

○昨日安田善次郎方に稀書複製会の日人
集会の席を指て安田氏と示さんに同去の内注
本を紹介する如左

暦　二種

一　元禄十四年かのとのひの貞享暦
伊勢度会郡　山田　永田長太夫
と巻首に署す　教山版　巻子

一　慶長九年暦　三百八十二日
活字本　巻子　この暦は珍奇
也

一　芳野巻詩
文禄と豊公醍醐花見の和歌を収め

なりなり他版に見しことあれどこれは流布本なれ和歌見えざるなり

一 花傳書一冊

安田の藤本四種あり皆流布本なれ互ひに比較すると何れも流布異なり年代も多くの相違を見る、北書は殆ど流布本に近きなり

外に大概文彦四郎の足利代写本花傳書一部あり 文彦の識語を掲ぐ 寛文五年九月の刻本と同じとあり 又云北書の一二三の巻は校本と同じく 四は校本なれは八となり五八四、六八五、七八七、八八六とあり

榛原製

一 法華經 巻子本

松花堂昭乗の藤花と覆しく惜々斎の朱印紙のつぎ目に捺してあり、白麻紙の紙泥花鳥の絵あり 書見ごとなり、源左府俊房公の筆宮と云ふ 巻末に昭乗の記録あり

右法華 方便品 傳来

源左府俊房公之墨痕云々 這公被書宇治平等院額扁之由見于続書傳今以此経校之恰如合符節无毫釐之差最可謂斯道の珍寶乎依所望加奥書矣

寛永丁卯孟春日　昭乗花押

北臣の姉妹巻近江の竹生島社の絵しあり

四賛也

北外山流三年の具注暦　大流字本和玉斎

三冊を見る　浮稀獻の書也

六月十一日記

○初夏の北陸い誉の義生物び、誉の名所を以て称る

大宮のうち案内が来れ、自今の荒い陸あれ〳〵氷川神社

附山の社を訪つれとことがあるが、ツイ誉を見れことが

ないあまの書を撮ると、大宮駅をさる十六丁計りの所な

東西の用の路がある。東を見沢川と云ひ、東を北之川

又い悪みと呼んひみる。川幅の広さ六尺、真夏

に一丈、夏び南方に流れる。北二川を最生き

る誉い古来源氏誉と称する。尺沢川の誉ハ源氏び

義の大ることを光りの優れる此と指を日本第一と称

する芝川の誉い平家誉と称し大きさと光ハ源氏

に流れど、力い優れをみる。今より十五六年前ハ北

誉が勢を盛して、左而も今計れを見ることまハ

明る美観を生し此、未だ一国を為す誉が見ひな

術完して、元敬する共殺所の光景ハ光うと星の数

まることく壮観を極め、源平誉の名も美明ふさ

まから起つれと云ふが、今ハ乱獲の為め北の壮観を

見ることが自出来ないと云ふ。大宮保勝会ハ乱獲

を禁じ、氷川神社では時流廿六年六月より神官齋戒沐浴して苔を捕獲し皇室と書家に献納すること

などが例としてあること

○六月十一日八幡宮時の紀念日の明治天皇の御誕生日

中の中空校長の暦学三十五年勤続祝賀会

があり、さんざん騒んで一休の法話を作られたれば日分

八時の紀念日と思ひつき、時の紀念日まで何人も時

に就てあるの感慨ふかきを得ない、さんざ時が

きまで美感懐のあるとおりの有りとおるのに

此分を見るのは面白く意味がある。偶然なる所

が明の時を得た。全体時いろいろのことを計る

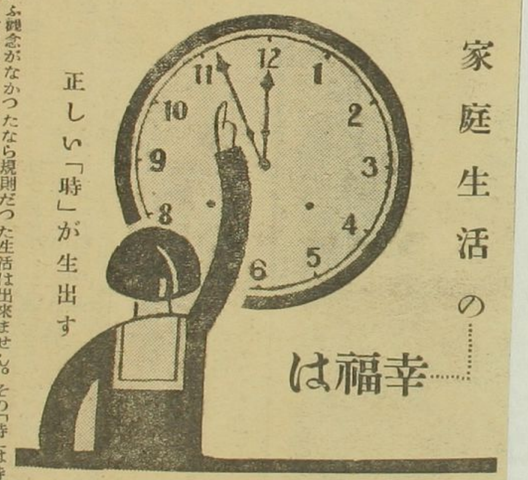
尺度である。中空居士の暦六十一歳その

榛原製

昭和七年六月十日（金曜日）

6月10日は「時の記念日」

家庭生活の……幸福は



正しい「時」が生出す

もし私達の生活に「時」といふ観念がなかつたなら規則だつた生活は出来ません。その「時」は時計によつて示られるのであります。「時」を尊重し時間を正しく守ることが大切でこの六月十日は第十三回の「時の記念日」でありますが、これから、昔の時計のことについてお話致しませう

なお以上、乃ち三十五年此の勤続さんにとても

感が強く幸福なる事業を計る尺度である。亦天

の功績を計る尺度でもあると云ふ中空の功績

受けることを来たしてあらう。貴人のもとに
将来ある君の髪を祝する事
葉と時計を結ぶ事し、
することが本當であらうと云ふ説、
全部の稿のスクラップ、ブックに收めてある
○三宅村の西村徳太郎氏の新山湯遺蹟三十数點
の予が一生涯の研究に縁因がある。先ず西村の記
族が寺詣を失敗したる北の道を尋ねて
ることと、真摩と新潟県の光明寺の品々は
向北寺の品々は移転
した兄さんが捷道とする。西村家の高くひい、北

昔の時計色々

早大教授　西村眞次

……昔……の人間だつて決して
嘘で仕方がなかつたわけでなくか
へつて今の人間よりいそがしかつ
たかも知れません。いそがしけれ
ば時間が惜くなります。一体、い
つ頃から時間といふ觀念が出て來
たか。はつきりしたことは分りま
せんがもはや新石器時代にはちや
んと暦さへも出來て居たほどです
から、一日中の時間などはわかつ
てゐたと思はれます。
初めに分つたのは日中の時間で
す。どんな野蠻人でも夜が明け
始めると東の空が白み初めて太
陽が東の方に昇り、日暮にこれ
が西の方に落ちることを認めな
いではゐなかつたでせう、注意
深い人々は更に太陽が昇ると山
の影や木の影づ岩の影が地上に
さすことに氣ついたでせう。も
つと注意深い人々は其影の長短
のあることを知り得た筈です。
即ち朝の間は

……影……が長く引き、日が高
くなるにつれて段々短くなり、
午頃は最も短くなつて間もなく
段々長くなり、日暮には朝ほど
長くなるといふことを認めたと
思ひます。此太陽が昇つて影の
長い朝から太陽が落ちて影の見
えなくなるまでが晝で、また影
の長い朝が來るまでが夜です。
昔の人はそれ故に、一日をわけて
晝と夜とにするといふよりは夜と
晝とは別に規定してゐたのですが
段々に二つを合はせて一晝夜を一
日と計へるやうになつたのです。
そこで昔のかしこい人は、地の上
或は板の上に棒を立て、太陽に照
らされてその棒がかげを地の上或
は板の上に落ちるを見て、時間を
計ることを工夫しました。それが
即ち日時計です
又、縄に火をつけてそれを燃やし
そのもえた長さで時間を計ること
に致し、およそ

……晝……間の一しきり（一時
間）にはどれほど燃えるかを知り
結び目を四つ造つて夜の四しきり
を知ることが出來ました。後には
ローソクに刻みをつけて、それに
一、二、三とかいて時間のたつの
を知つたこともあり、また燈明の
油のへり方で夜の時間を計つたこ
ともあります。しかしこれでは甚
だ不確で風の工合で火縄が除計
にもえたり、ゴミの工合が燈油が
少しか出ないことなどがあつて
日時計のやうに信用できません。
それで次に水時計が現れました。
これは數十年前支那の黄河の岸に
住んでゐたアーチー（伏羲）といふ人が工夫させたのです。彼は多
くの奴隷を使つてゐましたが、一若
し夜の時間を精密に計ることを工
夫した者があつたらどんな褒美でも上げよう」と申し渡しました。
アーチの奴隷にソレといつて、日
時計を見て鐘をならす役をしてゐ
た少年がありましたある時フトか

めの水がそのヒゞの間からポタリ〳〵落ちてゐるのを見て、これに
暗示をうけ、かめに孔をあけ孔から
もる水がどれだけ減るかを調べ
既のやうな細い木板
に柳の細い枝をつけ
それへ同じ距離に色糸をまいて、
白、黄、赤、緑、青、黒といふ順
にしました。水が減れば減るほど
白から黒まで段々と水位が低くな
るので正確に夜の時間を知ることが出來ましたので早速主人にこれ
を見せました。そのほうびは何で
もやると云はれ、可哀さうなヨト
といふ少女を奴隷から救つてくれ
と云ひ、主人はそれを許して二人
を夫婦にしてやつたといひます。
水の代りに砂を用ひたのが砂時計
です、それから時計はいろ〳〵變
化し今日のやうに立派な精巧な時
計に進歩したのであります

北越新報

榛原製

等の品々は他物の豪家森三郎兵衛が東都へ渡り
び於石堂から得たと云はんとある。自分は伝
し山陽の室が歿した後、堂も無表の彫石堂に
移んで彫名を仕来したことと想像した。現に自分
が刻意を回受けて、つるべの花瓶の彫る彫石
堂の烙印がある。他にも烙印の有る器がある
のに、於石堂から出たものと思はれる。
一面の前橋石堂主能（谷信吉が彼地に来たのに、
取敢ず、山陽の夫人歿後其の遺品の仕末をした
ことがあるこを聞いたに、其頃は自分は若い時で、若
者頑宇者に任してあつたのでよく心得ぬが、貴名海
内の遺品の私方へ引受つたことは確かにあるが

樣原製

新家のものへ引受つたとのこと、伝てつるべ
の花瓶を示し、先づ彫石堂の烙印を示した樂
と自分の所持する烙印とは異なるとの事。
彫の表面の文字に就て彫る者を考へるに自分
こ毎しとこの大いなる失望した。つるべの刻字刻
書と就ては、能又瓶祝の上、この刻字その山陽先
生題〻〻〻

すくて廣告びをすると、山陽堂新聞社が明んでなり社業が、終印まで偽造）してある所から考ると人を欺く為めの業が、何んとしても長き一杯喰さ九れことを自から慨てる為ら。六月十日記

○吾り活印刷会社の半季計算に基づく好成績である、次は季八越の不況であると如ん多くの社内節儉を為ら終的徐徐ながら多くして尚ほ八歩の配当が出来る、えを他の会社の頗る窮乏に陥すんで仕合と云ハ故ならめ、成績が挙ると、競争会社から猜まれて、答酬く向て活印刷代が高いから、儲かると言ふきつけ客を横奪せんとするものもある為、八分の利益を一分なりの殺くべきやとの説もある。

法定積立金　六、〇〇〇　五、五〇〇　六、〇〇〇・〇〇
別途積立金　一二、〇〇〇　一〇、〇〇〇　一一、〇〇〇・〇〇
退職手當金　九、〇〇〇　六、五〇〇　八、〇〇〇・〇〇
株主配當金　五〇、〇〇〇　五〇、〇〇〇　五〇、〇〇〇・〇〇
役員賞與金　九、〇〇〇　七、〇〇〇　八、〇〇〇・〇〇
後期繰越金　一四、〇五六　一七、七一九　一八、九五四・八一
配當率　八歩　八歩　八歩
社内留保　六五、〇〇〇　四七、〇〇〇　七五、〇〇〇・〇〇

年度 科目	四六期（四下）	四八期（五下）	五〇期（六下）	四七期（五上）	四九期（六上）	五一期（七上） 案
利益金	一一五三三〇	九〇三五八	一一五九三一	一五四七四七	一三二三〇四	一五四八〇三・九八
償却金	二五〇〇〇	一〇〇〇〇	二五〇〇〇	三八〇〇〇	二五〇〇〇	五〇〇〇・〇〇
謝恩及慰勞金	二〇〇〇〇	一七〇〇〇	一七〇〇〇	二〇〇〇〇	一七〇〇〇	一八〇五〇〇・〇〇
差引利益金	七〇三三〇	六三三五八	七三九三一	九〇三〇四	九〇三〇四	八六三〇三・九八
前期繰越金	八〇七九	一四〇五六	一七七一九	六四一五	六四一五	一五八六五〇・八三
合計	七八四〇九	七七四一五	九一六五〇	九六七一九	九六七一九	一〇一九五四・八一
法定積立金	三六〇〇	三五〇〇	五〇〇〇	六〇〇〇	五五〇〇	六〇〇〇・〇〇
別途積立金	七五〇〇	六五〇〇	八五〇〇	九〇〇〇	六五〇〇	八〇〇〇・〇〇
退職手當金	五〇〇〇	四〇〇〇	五五〇〇	五〇〇〇	五〇〇〇	一一〇〇〇・〇〇
株主配當金	五〇〇〇	五〇〇〇	五〇〇〇	五〇〇〇	七〇〇〇	五〇〇〇・〇〇
役員賞與金	九〇〇〇	七〇〇〇	七〇〇〇	九〇〇〇	七〇〇〇	八〇〇〇・〇〇
後期繰越金	三三〇九	六四一五	一五六五〇	一四〇五六	一七七一九	一八九五四・八一
配當率	八歩	八歩	八歩	八歩	八歩	八歩
社内留保	四一一〇〇	二四〇〇〇	四四〇〇〇	六五〇〇〇	四七〇〇〇	七五〇〇〇・〇〇

もゆきつけ客を横奪でんとするものゝあるを以八分の利益を一分なりとも殺くべきやとの説ありあり。

○自から生存中に自家の銅像を建てるなどは沙汰の限りであるが、然らずとも恩人に対する神社を建て其の生前のことを建て美を尽くすなどは後者よりも価値あるものである。銅像は最も尊ばれるべきものである。人の事業功績を欲しるのである。実に世界大家の事業功績を、百人が百人、千人が千人、その人を仰ぐこと、ばかりである。生前の銅像を建てる者は危険に動もすれば美銅像を汚すやうな侮辱を醸し出すこともあつて、折角名誉の為めに建てた事が却つて反動を起こすことがある。言へば建つべきこの世に女人の遺徳が推々役れもを自然と伝へ建てらるべきものである。早大前高田総長が

榛原製

銅像を建てるに校友会は銅像を造つて早大の校庭に建てることを決議し、本年十月早大五十年式典まで遂成せんと今急きつゝあり、校友の新総長と熱烈なる感激の表現として動ることを企てるは敢て不可なるべきあらず、唯此之れを流して高田総長の心事に就ては、その心事を高田に進言するなどのことをもあらさるが成りに任かせ置き、高田も自覚して、生前の遺徳を流しなることを誤れりとするも、その意を余す所なしい、銅像成れりとするも、その命中は遺徳するの不本意なり、折角校友二度は流しなることとなるべし、遺徳の時は多く銅像を作

ふかしと、予ハ之れを賛成（吳の誠徳）の効くゝもことを現ハるべしと云へり、志かし折角出来るものと五十年式典に建つ所存とし此れ、恐らく面倒を生ぜん。寧ろ初めより生前の建設を不可とし、死する難數も無りしなれん。今ハ及ぶ可き、今ハ何事につけても同着のある時代、前述ごとく快からぬ事が、銅像キツかけに何ごとを起さずとも言ひ難し。高田の表裏ハ此度とあらん、自分ハ急き銅像に刻む紀の撰文を托さんあるも、高田の心事ハ差向人と語り難きことなれバ、撰文をもめるべきや考量中也、前年も大隈侯夫人の像を立てんとする様に聞ク論沸騰す、斯る事ハ注意を要すべきせ 六月十

三日記

今校建てある大隈侯大礼服の銅像ハ、早大のものとしてハ似合の時装なれ、若し高田の像を建てとなれバ、女使ふてハ神和なれ、而似合の域ハ一層ならん、故に先ず侯の像を今改造しつゝあるこれも五十年式典を期して建設の若しも、其の改造も高田の像を建る動機なれ、志しなれハ事実に、高田の像も既に建つべし、高田のハ既に五十年式典を待つて可なり、似し銅像

○案頭の木堂猛烈（追悼録）を読んで見ると、木堂首相（原敬）雅の後古時一雄が木堂の遺族を救ふ（比其の速記が掲げてある、その中に田中前首相（政友会総裁）と木堂を比較した一節がある

木堂が政友会総裁をうけた時堂の特徴の一人がこんなことを言ふたとある。総裁を戴いたものと、田中総裁の時とは、総裁が素人だから、指導するとうけるが、政党のかういふものだかうしたらよいか、御指南為来なんて面やる。田中のことばーうまくやってくれる、其上金がある、利権がある、これを乗りまわすさうすると総裁は飾りまを頼てくれる

ばかりとなるの総裁は、政界きつての玄人であり、指導するところの聽きがはうの、おまけに金無い、利権に禁物と未だある。忌々しいからの悪口の一つも叩かうと思ふと、その方は向ふが達人だ、実に玄人だ総裁を素いたらうなと

田中大将、面倒総裁の比較、涙流ゆ現のさんである

○方面委員の話が出た時、涙の夫人のことを海つた。夫人を切る人が世中のあつて、説くのを聞くと、有難あへどこの行くるる夫人田舞である、和解総裁の時も夫人は田舞ばかりあつたの方面も夫人であるから、夫人の扶けを要するからであるあらうが、

えんを商業なる洋ぶるく、夫人は子爵のお出の時も大抵
日傘で、いつも良人の前を歩まず、何かことばくと、子
爵の後方より附従ふことが多いから、後ろから狙撃
さんることといふのが、狙撃とうると前から来ると
違ふ者から、てきと前こ歩いて、第一の時うへ自
から弾まる覚悟である故なと、夫人は故仁禮海軍
中将の女と云ふが、南世子孫くい別婦である。
○清浦新内閣の元首と仰かんとする清隆は常に黒
色の眼鏡をハメテ人を接見まる光沢吉柳萬恒
が過失した時も矢張り黒めがねをハめて居た。吉柳
は寝ぐるの怨毒の近侍する眼ひもつるのいのかと疑
へも見るとあの人の眼い極めて鋭く人を射る目で

其の鋭さい人の正視を許さい位である。あの眼
鏡を用ひるのは、眼の病を隠つ為。四雑の間を育つて、死
法の間を歩くと、眼も自然
○毎日業務に従事する政治家は常に鉄を手
して下りる庭園は小さくと雖も我家の小山林である。
此の場合の事は、雨の降りこめられた庭を
下り雨後、戸外を望むと、雨を帯びる秋草
も一入の味がある。古びくさを眺めて都門のふる
里が有る自分をそれ、家の小山川を愛玩まるよう
外を方法もない。いくら不住海びあつても楽あるべの
庭が欲しい、家居の多い老境を入ると別てそうび
ある。庭を欠く所のものを補ふ法も無いでもない、此

今の庭園に八幡さまふさはしい。元溪の大悔を床に掛け
て居る、こんな庭の景色を補足する一法は、西洋人の
などの解しない東洋趣味である。自分は自然
の山川をミニアチュアに庭のまとして楽みたいの
で、折りの重なる積翠を築くことを最も厭ふ、花樹の伏氣を
然し、つゝじのある位は差支ないのみならず、却
つて翠緑を表徴させ、ちょうど庭のつゝじが
ハ幡さまで合歓花を放つてゐる、皆住稚び紅色で
侘氣がない。池一杯を敷てゐる睡蓮も漸やく
和花を為しかけ、芙蓉世界の如と云くばこれ丈
である。光茂の愛い歳增水もふべきであらう。荒し

榛原製

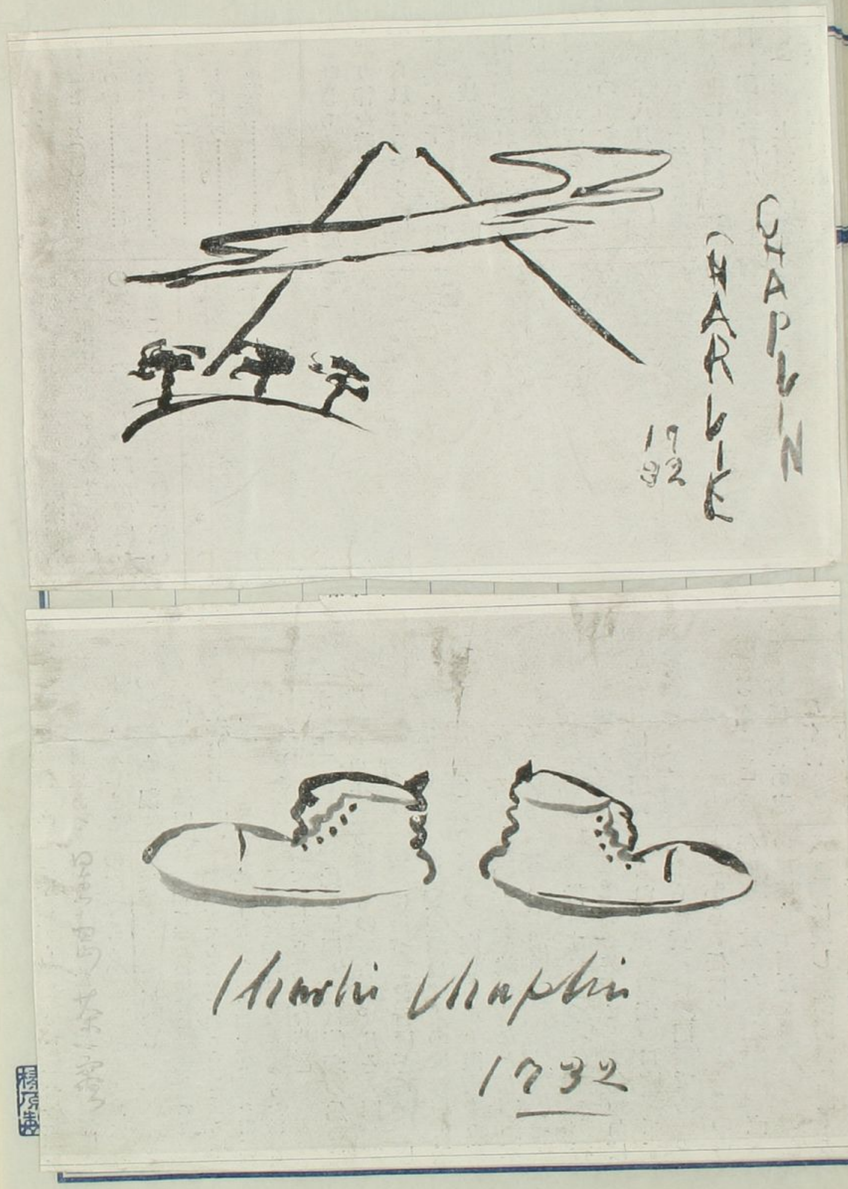
大丸、玄関前の殺伐なる面花壇亂、スウサト、ピー漸
やく謝した薔薇ハ火を吐いてゐる、自分は最も野
バラを愛こぶのだ、これが文化の高さを及んでゐる
のもある。これ等解ハ後園とハ極反対で荒い世
界である。此の自他域の世界の放任しておるから、飽
まで流手である愛を趣がある。未だの人ハ入口
の流手を勧つろき、世界と入り更に庭園の元
然と愛ろく。

○チャプリンが東京市長に招ぜられ、星玉峯家
を兼ね比書ハ稀拙ながら天真流露の傑作の
趣がある。詩意の破れ範の圓ハ最の珠とす。
べし

○家元の手習をした故を不寧の表裝した一帖と
なったものがあるが、其傳と取り出して見ると、夏目の
さうんが何人の手習か紙びあるか、後のものもうつし
し得るものもあるまいと思ふが、帳の首めて野の説
法を聞いた

徳川年代の家元の大雅の手蹟と係る
古法帖があつた、その裏打する古い手紙數
が用てあつたのが、大雅が飯田を夜せさるを
とる程度手紙をしてゐる。意味い其の蹟
を思ひ出ぬ改裝したが、名家の遺蹟を二葉づ
切ったと一帖に裝したのがこんでゐる。大雅が
拙の軸箱や表の紙の表裏の紙と、字をおろす

六月十四日



を細心であつたことを見る一端もこゝらにとゞめて
其由を記し家に蔵す

○書画屏風等より二三の書画を携帯す山陽の新策稿
本論製改之一冊巻跋等書塔具足すること肝要
の苦楮毫七箒と法象を見る、恐々宮を挿入
して人を欺くこの余一定之を作く、栖鳳の絵小点
屏を画き舟中の人藻を刈る、藻は流れこゝに描き
丸苔、叫花者の嗽叫の和尚師子を傾倒こゝにさ
へ八字故さずと云ふ、其の深を聴けば モーかん絵
ばからと云ふ如と 聴き彼木の御弟を撫く
の画を一笑す、翠雲の役等の社会を喜ばん
さるの 筆中未運 と書拙画 まるから形也 五一

画冊を見る識者人画する所也毎頁山水を描く
表紙見れば許多の○筆のごとく満紙塗抹 禅
無雑を極む、巻首の巻頭を浸水妃を北の
画の由来を欲す、浦上玉堂の画を好む人多し其人
識者と画を称ふ識者玉堂の筆法を倣て
と、玉堂の画倣へば識者の筆と異見を伝ぐ
陪模 雑し、自からも筆を他と倣ふ笑をの
大す堂准識者の文をんや

六月十五日記

○高野北海本淑久しく清水三十人年 各四の山水を探討し胸
中の形本を高む、嘗て岩見沢下沼田の清水三十人年 各四の山水を探討し胸
を作る、其の瑠璃の世を倣ひ、今日一本を
得、相模の山水百回を必る者、容易ならざる 古人の

粉本を頼るよりは自己の胸中より徒らに新意を出さんとするあ
怪奇の流るゝ所、実を去らざるの風致を採く、但北
海のことゝ内地の名山水を探討研鑽し、今百図を得
たるに初めて百図を作るを得たり、世界の名山水は絶
山水の姿態一つも同じきことあるなし、北海は粉本を
して百図の内に在り、北海は粉本を写し、採る故に
其図生動す、余甚だ北人の筆致を愛す、家翁北
海の外游中スケッチしたる図百数十枚あり、今亦版本
百図を得たり一言を記す、

○夏時室内に置き味を楽むべき何かと散策中
デパートの盆栽部を通り花菖蒲を獲たり、風趣尤あ
る、これは竹の鉢に植へたる葉は細く且つ短く

勝原製

く長し、密集鉢に植へんば葉は方に乱れ宛から
玉衛門的悪方の髪に似たり、殊に清らかとし
微風来れば葉皆動く、風知草の名ある所以
也雲根の巨幅を掲げ其下に置く最も風致
を発ふ外に月見草一瓶を買ひ花壇にお
いす、これは朝白に似て花の色黄朝白は朝の
花なれども夜の花なり、紀の花優しき一種の風
味あり、情緒きわめて栽んば野趣あるべし、予が
宮田なる町の端に日町の端に一茶庵あり、主人風流
の士北海の草を次つて四畳半を作つて、栽
蒔し、時に風致あり、余も亦一時態々訪ふ

て之れを賞し茶を喫し杯を挙げ友と語り月を迎へ
悠々と忘れて深夜に及ぶこと有り、田舎に多く
ある草、他草を交へず、特に此草を以て婚を
飾り、其所に妙趣あり、平華福と羅り高田の
監倉に遊ぶ、遊ぶ後新潟の本堂と護送せらるる時、
多くの知人手を見送る、此余庵を空しく過る
能のず、特に護送の獄吏に我れ知人と談
笑し別る、微々たる野草と雖も遺懐を禁じ
得さらしむるあり、

六月十二日記

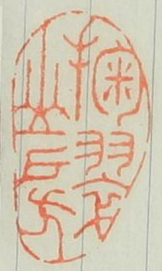
○中林梧竹の遺印三顆を得たり、梧翠山房の印
鈕に陳曼生の流儀を刻す、但し改刻、梧翠山房の
石痴の印刻せること鈕に刻しあり、印文余のとなる刻

榛原製

まる似たり、余の用印と為すも可なり、家鈕の印鈕の
刻も可なり、家の北門上人あり、鈕の四角に刻之
ある処子石の刻は重業の也、余梧竹を識る、これ

梧鈕
石印 陳曼生 石痴改刻
曼生と刻す

曼生流儀



象鈕 鈕自之
清家
清子刻

此等の印梧竹の
那に遊んで獲たる
似たり

款文石 無款

を得る多少の縁なきにあらず

外に譯本英子國画傳三冊を贈り、椿山の口授を

椿山、井に「琢菴老記」の印を捺す、龜頭に初め

の書入あり、並木学大石曾て花し予が寓目を

乞ひしもの、今余が架中に收む、人生の出会と因縁あり、その花を一時並木に帰す、こん

も其間の者也

六月十三日記

○男女両性の交りなど予頗らく見くるものいまへと、

ある倶談の席に隠微にて移ることまむる振

舞の如き数則聚けしことあるが、言ひ漏らしこ

とい、恋愛初頭を移ける両性の態度にあるこん

も亦逆と見るも、如何なる予頗のごとく見くるあ性

が心動ける許しても、互ひに投合するまむるは恋

愛がある。如何に互ひに恋愛を燃へるとも、うぶの

男女なる互ひに羞恥があつて、放膽に言ひ寄のさこ

とが出来ない。言ひ寄つて一方が應じないかも知れぬの

で、恐怖がある。誰れも自負のあるものでいあるが、情

人に対しては自負心は抑へられて反対に

自己の缺点のみを考へくる、己が風貌を顧みず

が性癖を顧み、己が地位を顧みず、己の無徳を顧

みず、己の資力等を顧みず、左の如き缺点とするなど

の事でないものまでも、大なる割引をなす、ひどく自

からを卑下して、平生の自負心はどこかに隠れて

仕舞ふ、作人に對する如き隠頗のごとくなる。彼等

小胸中秘める恋ゝを表ることが、相手の看破せらるゝことゝなり悼る。よく初め会つてゐる間柄ひも秘める恋を前すゝの前の快潤を語つれゝるが、あゝ無口なる人無き所なる人多数ひもすること、互ひゝはるかんで何ことも語らず、胸の内ばかりどきゝしも、間の悪さに堪くう抱て、穴あれゝ入りたいやうな氣するる。而性が接合的恋愛を抱へてゐる共の初頭と杜ては、外部から見ると、間柄が疎隔してゐるかに見へ、仲がよろしいのであるまいかと疑はるゝるほどである。保し嫉妬心は猛烈に燃へゝゐる恋愛の相手が他に持があるか恋やを察する極度の注意を拂ひ、往々誤解を陥ることもある。相手が他人にフランソワに語つゝ載へれ

りするのに、胸間の花蕾がふくらむことであるのに、相手はそれを以て我に持ちゝ従れ、嫉妬の焔をもやすことを理解せゝ冷都を全く缺くのも恋愛熱の為す業である。両性が互ひゝ恋心中を探り合ひゝ間へしるものはうるへ。人間のすこれ苦労するものはうるへ。特人に対する嫉妬心は雑へ炎焔を発するのである苦痛を免かゝれ為め特人に表さるるものもあるが表かつも矢張炎焔を打消すことが出来ぬ。如何の点に依れば所謂る恋の病ひ、醫師の治療の出来ゝる病ひ失恋とちがつて別して重態と謂る。さればゝ恋愛は確ゝ大ゝるスペキュレーションで、其の勝敗は

一の繋つて両性の接合と変と在るのと、あるが或る機会を爆発して相愛を結んだ何人でもあることだが、その蓋を明けるまでの苦闘は富士者の又が知ることだ。内心こそ烈火のごとく燃へ寸刻の休憩も許さないが、外面は甚だ淡々として寧ろ冷静しいのが、恋愛初頃の風景だ互ひに情思を通じるまで孔雀の勇気を要する。うだる男女の間柔の弱いが常びあるの外冷内熱、口もゆうるいよりもしい愛と知つて其情が存するも明白の事情であつて、こんも事が無あ性事情の一景として追補すべきことである。

六月十五日記

の時分は熱の過剰で光れは相撲が出来ないと熱を

熱の生活を一下面から知ると、人間の役割の向上性を助けるけんがあるかと思ふ。熱の楽殖を図るとなる過剰を生ずれば、それを放流しなければならぬ。何事が行なわれるか、徹底的に伸いて長ちんやうと思ふ。多摩川

そこは昔しから粘土の名所の河であるから、都合で富士砂利は此河から取る者多く、水を濁し、砂と粘土を多く流し、名所地とするやうなるもの、今は切つて和摸川を流れの堰ちがつて来た。別産粘土つゝ。保し和摸川も流れの堰ちがつて来た。粘土を保護することあり、激流がある。粘土を流し得るのは、激流でなければ、どうもつて来る道を通じてけん心する人のいそんが無い。相摸川でもよい粘土を捕へるくらるもあらう。粘土の流れを稼ぐと、自分が通る船を流べとは原木を粘土を粘土を通獲し得ることは不思議だと云ふ。全体そんな粘土の流れは流れ流れば、ふるぬれ、ふるぬに障害があるから上ならずまでしてしまるのかもしれぬ。或は流の粘土が無氣力の為

複原製

めもとも思へるとも云へるが、そのほかにも粘土が充分の養達を為すに障碍があることは多いやうである。

偶こ前田侯爵家の粘土を釣るまゝと云ふ者を手傳つて和摸川の一二郎を頂きたく左の如き記録がある。

昭和五年の六月廿四日のことである。私は釣友二人と二日間つて桂川鳥沢まで和摸川筋を原木まで下つて著頂の状況や、釣場の視察をやつた。その時小佛の峡谷を離れて和摸平地に這ひ込むとする小倉橋の上手を流れ用水堰の一方の水門を流れが急流のように流れ出ると振り下げられ、拾ふも濁流のやうなる粘土の溜上ができるへそ

こゝで、堰下の淺瀬に出くわして停滯するといふのは
漁業者側にも数人の者が陸揚中であつたときいた。
ようも其所へ舟を停めて実況を視たが、私達の
着いた時は既に其の数の約六七百の魚が集つて
能登瀬数個を入れてみた熱を後にしてあつた。こゝ
は数人の注意によつたのであらう。然るに其の
能登瀬の上を流るゝ水は陸合急である。こゝに
疑問がつけやすいことは、流れ一射ゆゑ急
の休養すべき何もの無きことである。かよわいか魚に殊
に放流されればかゝるの現状湖のか魚も交
るのである。どうしてこの長い能登瀬の急流を一
気に押し切るか潮るといふことが出来ようか。

ようくてゝ、その能登瀬の目の石と石の間をいふ。
いふ魚がくつつきあつてある。その中から二、三匹
きづゝ飛び出してゆく。弱かく尾まで強と共の全身
を目を止まるの早さで、ようく動かしてゝ
一寸上の石の蔭にはひる。かくして能登の石を一つ
づゝ越えて立後の石一つを越え堰の上の淀を
身を躍らせて泳ぐ。なかなか弱い魚である。
するのをつくく目撃した。私は強い魚
力と辛抱とをおもつた。まことに勇の毒の底
を知れるのである。
自分もこれを後人に伝へる。人間
の為めに特殊の向上性と急流を溯つて、そこに能

を量かに作ってくれるものを、人間のなぜ手傳って障碍を除いてやらないのであるか、人間のすることは遠慮なくが閉きこまれバカにと云いしもある英人

邦人は一概に難を立身出世を志家する道としてみるけれども、それは一を知って二を知らないものである。魚は向上性が人生の障碍をも突き破って溯らんとする意義、その向上性は決して難を厭わるものでなくして魚は逆上するのとそうしんとあって世侍を屈くるけれども、魚も自然に天命を知りぬき、奮発の天職を尽くすと自然として死を就くけい無いか、自分の巣北の年魚三郎と一渦の流れをきを得ない。

六月十七日記

右模川に過しに際の記念の氏川の地理を書

いしかが、南不うしく補記すべし、北川の富士山林業の山中湖を源とし桂川と称し、東北流して大月に到り初特川を左岸に合はせ東方の向山を右岸に合せ模に入って右模川となる、道右川を右岸に合せて方面を南に転じ中津小鮎の二川を右岸に合せ更らに南走馬入川となる右模湾に注ぐ

流路十八里とする

釣場いもと猿橋を溯上の後ちとり鳥沢より上吉原、四方津、柴の瀬の渓谷を下りて道右川を合せらる芦川附近を経上とし北のが近年は原木附近の氣流天明の形域を釣り得るも

北のは富士の珍現象で鮎を釣るまでの若者

ハ云ク恐ラク、上流の河床汚土ト霉ハンヲ渐ヤ
ク悪化セラレ、放流魚の潮上ガ天然魚ニ及ハ
ザルモノ多クテ下流ニ止マツテ繁育スル結果デ
ヨイカト思ハレル、本文ト巻頭ヲ参照
芭蕉の句ニ鮎の子の白魚ニ別れ哀ト云
ガアル、芭蕉ハ流石ニ鮎の子ト向上性のあるこ
トヲヨクヒツテヰル。つまり人ト別ル時ハ人ヲ鮎
ハ壁ヒ自分ヲ白魚ト車ヒシ、白魚ト鮎ハ海
デ回遊シテヰルモノ、鮎ハ終ハ白魚ニグレバイヲ
ヨシテ河ヲ遡ルガ、白魚ハ向上ノ心ガアルカラ到
頭二寸魚ニ終ラヌコトヲ神人ハ知ツテヰル
モ面白イ句デアル。これ鮎を釣るまねのも

標原製

ヲ捕ヘルモノ、ソレトモ餌ヲ捕ヘルモノデアル。
○まづ実験家の言ハンコトヲ侵シ難イトルースガ
ある自分ガ桜田茶屋の鮎つりの色ヲ捕ヘテ感ジタ二部
ハ過候の実験談デアル。
鮎ハ天候ニツイテ他の魚族ト大イニ趣ヲ異ニスル特殊
の性質ヲ有スルコトデアル。ソレハ天候の変リ目ガキ
テ雨ヲモツト鮎の霊ガ上ヅツテ盛ンニ運
動ヲハジメル。ソレハ雨ヲ欲スベキ天候ノ流動ガ
ヨリ強クナルカラ大イニ燥イテ時ハシキリニ毛
鉤ヲモ追ツテ喰込ムモノ、友つりヲクヘクヘ抜ツヽ
ヨ、ところガカヨウナ雨模様の時フナやハヤ、コヒ
の鉤ハどうカトイフトバツリ喰ヒガ止ンデシマフ

もう今迄雨がこうとして降まもなく止む。静森を雨のウキはじりともしないのである。粘土と他の魚とを雨の前の天候において かくもその吸込み力及その結果を見るのである

何故、粘がフナやハヤ、コイの吸込みと及その結果を見すぐであるとうかこんいふまでもない。その餌の関係を困るのである。常に動物も主食とするフナやハヤ、コイその他の魚類は雨の為めにもすこしも その餌料を困らないのである。いや困らないどころか、雨がなんぞ陸上から色々の餌料がどんく海に流ぜ込む一時に量産とするのである。そこで雨のくることを、その体を感ずると共に新鮮な陸上の餌

榛原製

料を深山得べきことを知る。彼等は鈍感のスセウける怪しい餌の一部だけ無てくるいのである。今はよん餌かくるよ、その真求めとはなく此はも吟いるいのである。

ところが硅藻を主食とする粘土は雨の影響未の前者と全く反対の結果を招来するのである雨がやのそ来をそれが軽いものであれば そんひもをいかもー強いのであるう一時は増殖ひもすらも 角質石や岩盤に密生した食餌を洗ひ去るとしまふ。即ち硅藻の患をそれ小のである。一旦おのんの生存区域をも捨ついて食物を離れて更その他に移動しなければならるい——

少しでも硅藻の殘存するところを求めて移らざるはなかりしなり。まことに彼が取りて以て一大飛躍の基礎となしたるものなり。しかるに、もしこれが大洪水のためもあつた場合、その水域の平常復するまでは食餌を窮することはなはだしかるべし。故に天候の変りて雨多くなることは感ずるや、直ぐ硅藻の食物を求めるのである。市今は食餌を求めるに困ることはなはだしく、湯腹するまで食餌を求める実に熱心である。その性質も活潑なる市民のことなれば、この時こそ働きどころである。この時こそその特有の標準を遺憾なく発揮して食物を相手にし、又もばりをも追つかけて喰込む

のである。

硅藻の有無が四季の死活に関するのみ極雨が四季に大変化をも与へてゐる。極雨は硅藻を腐敗せしめるとのみ云ふ雨が腐らすとは云ふまでも極雨中の時にまで赫々の光が照すことが腐敗を進ずるのか、腐敗の傷痕へ云ふ特別に硅藻に沿ふものとなる。鮎のみが多の他の物らしく物へるものとなる。

○多日の特色を数へて三種異時度とする

天祖祭の展覧会を見た。入口に人倫訓蒙図彙の図を取つてあるのの時代色をあけた店を長つてゐる所を立体的に現はしー二三人形をあらつてあつたのが皆元禄期の姿人の時代色で、店先きの時

をかけてみる。四時人が社(国)の椿と云的さんてみたら、社員の
椿い友孫とその歌集の挿絵と書いて貰つて出版
してみるから、また二事寄せたのである。友孫自分の木
像、墓の写真迄も出てみたと。自分の生涯に失はれ
ける恋その墓を訪ねさせられしと嘆く。墓も像
金沢の卯辰山麓(四)寺にある。墓の大きく切んちう
つたのが、前年三枚の検討を依つて書見されたと薬
向沈を書いてあるのだのつた。面積三枚ひい高度物
年祭をすることをきつてある。友孫の事跡が矢
角的瞬を鋭くが、年譜を困ると、天和二年村山座
の歌を挿くとあつて友孫二十九歳の時である。是
家版の系譜の一代男は友孫廟が見くてある。

標原製

貞享三年版の三代男である。友孫廟が見へてある。此
年三十三歳である。元禄元年で友孫雖形が成る三
十八歳の時である。友孫の加賀を作いたことは確うひ。
あるが、何年で行つたことは未だ分らない。貞享四
年(三十四歳)の時四条大橋が焼行とき、元禄が賀
紋が見へてみます。又四年焼の源氏ひそのの
ひとつが賀深友(四)孫深は元くてある所を見つと
略る北沢と云見南がつうぬひもろい。先ご角漸やと
研究先ぜんに事実をまるとと承応三年生れ元文元
年(門)十三歳で死してある。今回の陳列に西村紋左
衛が会代の代表的の友孫模様を多数出展さ
れてあるのは、最も注意を惹いたる。　六月十八日記

○行書の成文堂主人が山陽遺愛の一軸を
惜く書く一画画の筆蹟を需むに乃ち如斯辛筆
を走せて蓋裏に左の文を録す

昭和七年六月十九日

北郭山陽頼翁遺愛也　古渡唐産金唐玲
瓏點々青斑　答画六合形貌毋太生　翁渡蘭
津日宿土豪山路氏典之主人其家久珍就衣
後帰五老山人高義石君與山人善山人
遂為君割愛焉　山人陳者　君使余摸名余
即命鳳卿蓋山陽翁之為人也　春風卿書

榛原製

翁最所愛重也　徵之名命名似不負
君意山陽翁酒豪　渡翁北郭帰遂所蓋
之幸也

春風　文識

○況大雅が為物一馬と刻した印家数多あるが、えん(5)
小移語とする解しても数多ある人々其義を問へん
と仮義に困しみ探索した印生の
義を得ざるのみならず、今熟考するに右の書を得た
荘子の語であることを知りえんとして初めて印の
馬を数と読まざることを知りおもしろい。(寸)(尺)の説
(さから)、諸解を得た。馬を動物と考
へたのである。

あるいは必ず知恵をしぼり
出すことを言ひたい筈
なれども一概や何物一
切無しとも言ひ、何物無
は数と言ひ有り、ものゝ天地万物と常
識上とは別てども共実は差別なし
一切の指す所の御法の方
は常に清浄
なり
特密なる
世界、特密なる
世界と別てはこれ
を常意同一と
言ふ意味
なり

榛原製

周の学と新説をもて
考へるべし
二月十八日
清水
堀
二月十九日
雨
第一の月
月曜
不動の節分

○六月廿日、今朝九時の汽車で五(ゴ)郎丈の前橋出張の為め送別の意味を兼ねて訪ねて来た。

○トートメントを書くのつもりで居たが、実は寿命は[illegible]と云ふことを許さず、別段感慨無量の[illegible]の話と交へた。梅幸の歌右衛門の[illegible]の[illegible]の[illegible]

鬼子母解脱の舞台面。右に座せるが菊五郎の耀迦、左方立てるは梅幸のカリテイ母

の梅幸ハ如何なる演出
こんな身体で舞台へ出る
のも信念の故と外ない放言
しかも楽屋に伝田と云医
者が来て幕合を診察を
してゐるとか云ふ仕末である
活動の足らぬのも無理ハ
ないが、全体役者ハ義道と
熱心が足らぬ。自分の新
心ハ役者の肝要なる家教
的演劇ひ、セリフを覚へ
るだけでも容易ならぬの

横京製

ハ催こそ一日の稽古で出ることハ乱暴千万
る菊五郎ハセリフが理解出きるハずと無
であつて、教へもせず、言ひくちびセリフハ
どうぞあれハ除いてくれると乱暴なことと言ふか
が、それを除けば素味が連絡しないことも甚しい
い憑かるあれとサン〳〵の罵倒である予ハ遂に
えどのんな程度指導するかと、唯ひたすらト
一面本読をやるまでハト書が長いから別段指
導いしない。大きな気取りである歌優にまくの
弟子も振るのに手を引くやうな指導ハ出来ぬ
ぬのと云ふ。恰度ハ北斗ハ北斗を放送するのひ
生田ハ其時に自宅ひ聴へて来て相手やつれと

堺内に報ぜしめ、堺内は之れを信じ、之れを信じて、宣道の決して兎角侮慢の出来のものなるが、此者から云へばこれを侮辱が未熟であるから、此者自分の多くの心が無台に浜ちて、今日を感じたのは三ツ位しかない。それは皆自分が用剤と指導されたのばかりである。と語つた。自分は宣道に別れに今後の心の何うと尋ねたら、重ね重ね血義の信長を書いて見たいと思ふと共の服あるが、あるから業を著はすると云つて、それと考へた。信長は宣道の名人の生んだ豪傑で戦国時代でもあんな一本筋の思ひ切つたことをやるものは無つた別して其の時代の風格は比類がないから、

樣原製

ら、ある者は宣道の為にひをつけたのも無理はないが、自分は信長が大好きで、豊公よりも信長が生きて居たら、心残りやつたことと代つてやつたら宜きものと思つてゐる。

宣道の伝次今の大衆文芸家が徳川幕の事を金瓶梅に無理解で、あるのは大膳を著を輝つて諸者の歌風事を喰ひ人をして抱腹絶倒せしめる馬鹿ばかりである。を云と云ふのは自分をも徳川幕の例を挙げて罵倒して業をひさぐ、梶山時代の為に屬することは誰人をもあるものもないから、業を動くが、徳川幕時代を通てゐる、其の事をとつてみるもの

が多いから、之れる業をつけることい大の危険があるのに
何も測べもせずに、大膳は業を動かすことの出来の限
りにと説つた
例の塔形の書屋に坐していろ〳〵の書冊を見出して
居たところへ四名主今井は太夫の家に来る熱海
の番地帳の宮しが目を惹いた。暁方の門人陵
亭の戯書熱海の浴客男女の裸体図一帖
を見せてろく風して、暁方のやうな嬉かろく、却
つて優るかに思いた。北方家の方の河岸の
の酒流が軒高くひびいつた。熱海の七十の老
婆がみる、えんの人う奴籍を脱して或る老婆の家の
戯絵をやうとあるが、えんが亡友岡山重吉の無名

標原製

沒ひあることやのくに。「岡山が訴訟用び京都へ赴いた
時ふとしたことから、南時義のうし北奴の恩を富
せうえ、確厚ちる「岡山の死内を惜り関係を薬し
たが北奴い養ろうとしたえんと従のいず、彦次郎まい
追慕しも遂こ思を果し、其後も春意の情に
出を続のず、西河岸の南時義の務を岡山を訪かたこ
ともあるとか、北奴い南時彦次郎三好十四
(秋敵)の妻とろう、ろ関係から軍人の伯父な
い人が多く、いうくの番地帳を読ろうろ少く
えは)るものがあると言はれが一多拙いも見を聴
くのも一興れと思ふと。名ハ書と言ふを
書室をろるえ臨人び書)ハ桜殿の側くる弟さ

れとあつて、織物の手長日様を外して、この小袖の生年の干支の図があるかくとうを好うえた。三延つるぶつてみて、相南の時代もあつて、ずゝ出来てみる。小袖箱中ゝいこんきゝのがないから、まだんび驚らん愛はれ

六月廿一日記

○雲義の書幅を特ふ、義寺の出線を紹ま極めも晩年の書也、雲義の書幅は珍らし

からさんらん自家の文庫に巻する詩ハ跡也

移して余が文庫に掲くるも可

卜得都出地月あ計不能、良朋尊右句

文庫一隅鉛

雲り有七十七翁口口

文庫が日陰ゆゑ、ろくとあるのも真実で

おもしろい

六月廿二日

雅んやらの俳句の絵画を書くも日南りもよく蔵

の花」といふがあるが、えゝ多くを迎えつてその見け

情ゆる必ずこゝ面白ちいが文庫をとゝ夕

日を迎るのハ市俗の表がありておもしろい白

らも夕日のさきはい大始めびある。

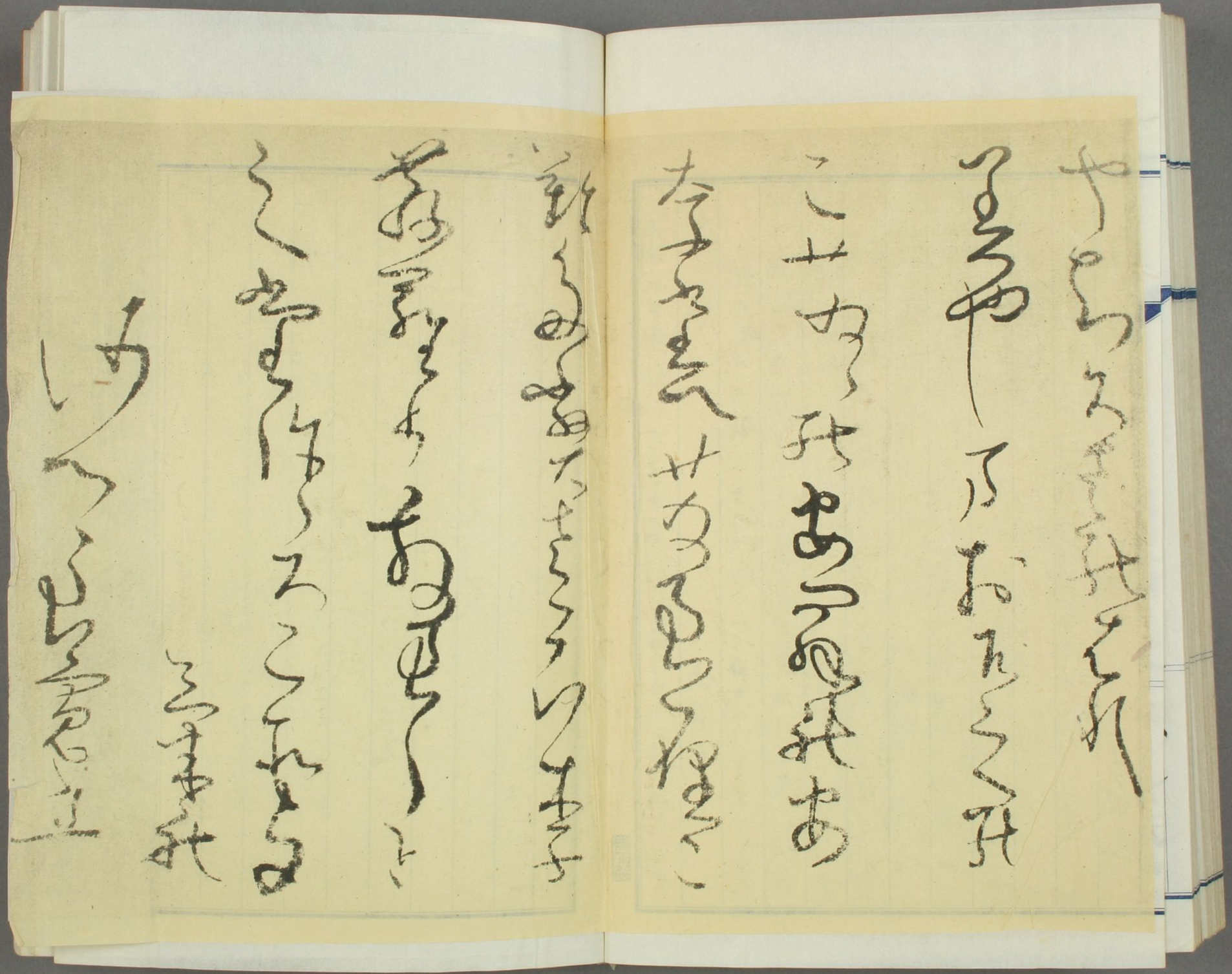
○備中玉島用西寺金毘羅宮祭礼の建碑

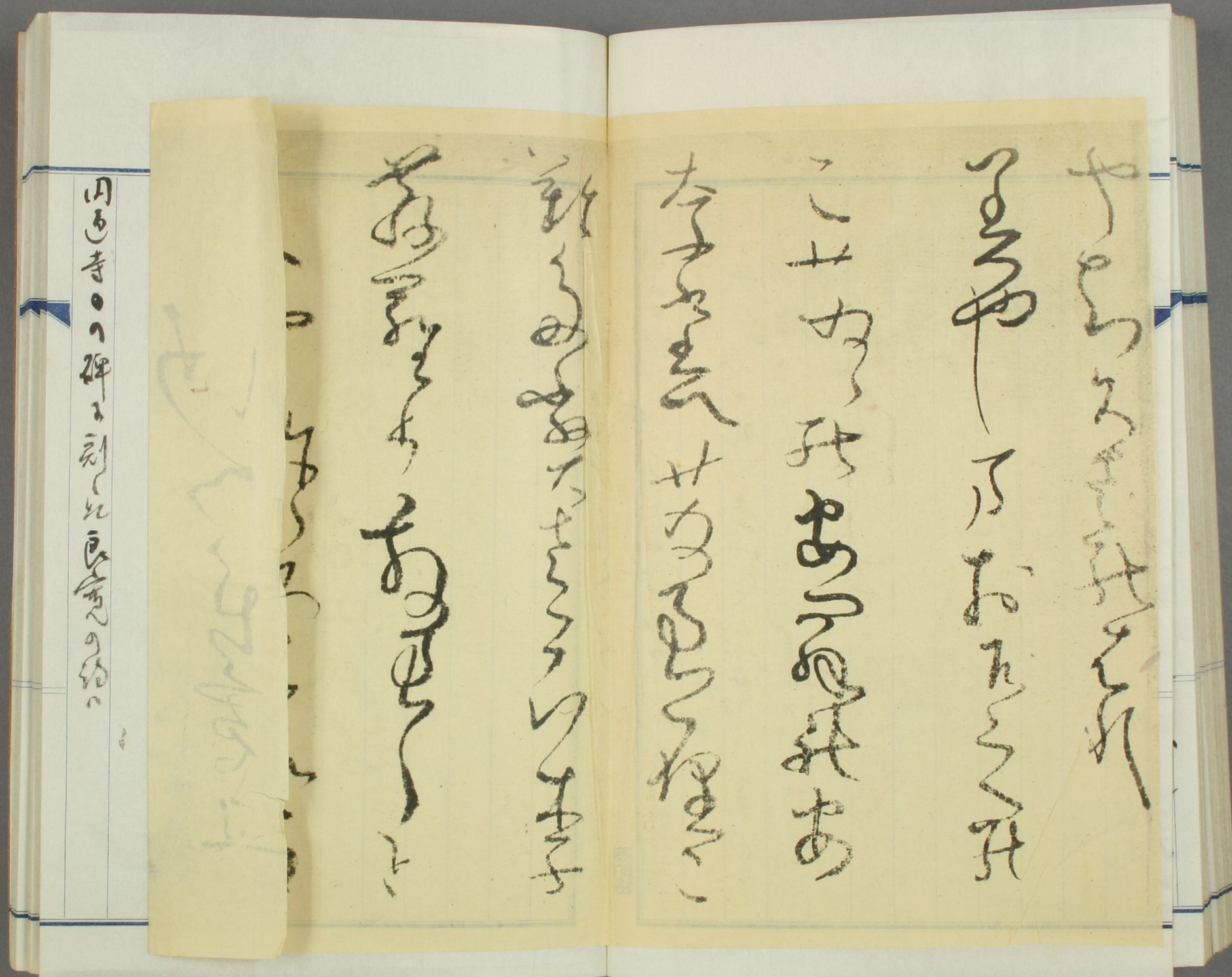
う義ゆゑ、紀念の祭行の即刻拓を書たきに

左の一紙も貴国のこゝろあるか

双山おろしの小冊の霧を以ゝくさらりこな

ゝくさらりとして心こそよけん





自来因縁寺不知或者門前千家無一戸
如一人衣服を自洗合者出帰閑学道者稀
僧可一清者

自分の夢うつゝ五時に行きしことあるも四五度寺を
訪ねてそこに人家のせらるゝに比べ俗人の家しかも庭園の
修行の堂をそなへ日々読経の声をもて故人を追
の塔や兼大池や八幡宮や八幡宮を
懐するの情を禁じ得さるものあり
○因縁話といふものは迷信が千倍八百倍なれども
興味をもつて人の口車の乗るものである。今一者し
ところに薩摩の藩士の若衆星田清隆が酔に乗じ荒いま
を殺し、つやうやくくく

引比とするにあらず、豪奢を極めたる伝侍は胸に一
抱があるべき娘を無くることを流して、婚儀の費
を極め、二十五荷の道具を買ひ、四十人の人夫を
雇し花々しいことに人目を惹いたが、何んぞ一
個の高人が参議の里方などうるさかろう、當時と
て異数の事で、釣り合へぬのは祖父の不世流と
あるを通ず、えんが伝侍の破産の本となった。その
皇帝御陵墓の事かあるも、里四の威力が
木材に惹く伝侍から取ることを申出したのが、
宮内省で材木の検査に陸軍の小役人を遣し伝
侍が仮倣であるとの、検査の役人の憤怒を買
い、検査の末木材の全部を不合格とした。

榛原製

伝侍はこれが為の数十万円の損害を蒙った。
えんがケチの始まりといふべき数が重なる的況十八年
を経て没落した。此の伝侍が如何に豪奢を極
めたかの一端は淀君の花屋敷を金閣寺を模
した五層閣を作ったも想像されるが、伊達侯
之れを買収し桜と命じたが、震災で島津侯
さえ釣る没落も悲命に陥れた此の崇りだと云
ふことも出来よう。初め宮内省から八木を除つた多く
の木材が立ぐさりとなったものを田中光顕伯が産後
に買収入れて西端の商行を去つて小石川の邸宅
の家に建てたのが一時人目を惹き、田中伯の宮
内大臣だから、此の材木は木曽の御料林を私した

和歌をへと、云未上の比家を泥棒御殿と名づけて行ふ
の時人々寄き立て、田中の憤怒を買つて公許とな
り、木材を換して木蔭材であることが知れ、田中伯の冤罪は有
耶無耶に附し比のち、今でも疑を抱くものあるなり
田中伯を迷惑をかけ、田中伯も大兵を蔵ふて外出
するやうなる場合こんな蔭りがつき纏ふ比日の比と撞
きあつかひをもつて。田中伯が孝子とする妖婦を
納れて後あまして終に離別したものも国縁法
しがある。法華法華経とといふ尊厳が田中伯
の比の御殿を造り受けて、法華経を奉じ
養し比。今の報知新聞の社長星亨政治の有

複原製

る如しとみるが、此の報知新聞のこを田中伯の
法へられ比泥棒呼ばはりとしたものであるが、
田中伯時代ぶ後いつてみるといふ云く不思議な因縁
で現出して受けてある。
なる報知も内実野る国難ひと云ふが、実に新聞の材
料となるべきまんが仕合である。

六月廿三日記

○昨日は上海駐屯のステーションに梅上の会堂で文化協
会と田端の織道会とのフワブの文藝部と共同して
交通に関する講演会をひらきました。
があつた。会堂に立る人を容るるものでまい世界
と問もるのあるから、主流をうるのである。自分を開人会の

撰移をなすべく、場所柄面白の感をきたす淋しさの
つとに。北の停車場は毛等が郷里に帰省する時の
関門である。毛等は武十四日北の停車場から乗し
て武十四日北の停車場の下車したが、武人と伍相
る皇室の恩である。震災前の停車場へ出るに
排迭び、他の停車場とはすると、なるる食物な
ものであつた。いつも北の停車場は、不快を感じ
同じく汽車発ひまるものの、北陸東北行の客人を
乗せて織為南局は何故差別待遇をなすの
であるか、毛等を侮蔑するも甚しいと、毎度
苦しい憤怒であつた。幸か不幸か震災と焼
けた。史後は久しいことがうつり遠び、一ト通りなる

榛原製

混雑を困難にしがやつとのことで復興されたが、
今度の帝都の表玄口としても恥しからぬ建築
が出来たに、まだ復興後北駅から乗車したこと
はないが、一二度限るく構内を検閲し、食堂を
ご飯食したこともあつた、保し横上の食堂の
ことをいわくるうるが、図らずもその食堂
で文的協会が出張講演をすることになる、自
分が先つ壇上に立つて臨席することを、自
今昔の感に堪えないものがあつた。北の駅長
清某は文的協会の会員で、八年間北の駅を
勤続であるが、昔の食堂も清野駅長の斡旋な
由つたのである

六月廿六日記

○日本の建築に瓦を用ゆることは日本固有のものなり。瓦を用ゆるは大陸の建築の模倣なるべし、即ち瓦の用ひ初めは寺の後援なるべし、寺を建家と呼べり、延喜式に忌部の瓦寺を瓦葺と称すとあり、伊勢高宮寺の瓦を忌み、新く呼びたるなり、蒙峻紀に百済国より仏舎利を献ずると共に瓦博士を遣したることを見る、瓦をカワラとよむは印度サンスクリット Kapala より来たるべしである。

○宗教者の保護に係る政治天皇の治世は大正十一年十二月文部省から発行したものである。閑と来て

榛原製

して拝読すること三十七ハ年、戦後に出征軍人を慰ハせんとて御歌を多く、感動を林宗し得るのが左の如きに過ぎざるかを聊か微ちんとして、国事に関係のない御歌のみを感吟する位かもて摘録した

水鶏

とのゐびとかなくなる夜は水鶏も叫えはてくらしなけるくよ

朝雲

雲のうえさあき朝かぜ国もりが笠とる手もとどこいあらむ

秋の

忘れしひくるのゝ秋のこだちぬを山のいかんまみ
まくらうむ

夏燈

文机のもとにかゝくうともし火の影さく暑くお
もふ秋はかな

葉

きさ屋の子につませまほしと思ふかな菫花さく
庭をめぐりて

山家

かき筋ゆゝあゝひゝきん松風の音も海ゆく山の
下に庵

行路杉

うすやぢの並木の松のかげみんべ苔の旅のし
のばるゝこゝろな

馬

ひさしくもわが飼ふ馬の老いゆくがをしきは
人にかはらざりけり

漁父

すなどりは子等に内づりん蓋の風に倒すく
爺あのんおいとう

隠士

山深くかくるゝ人をむかへても世を流ちぐきを
とはりはや

畑

国のうちを畑になしても
さまをしらむと　みつるかな　一つが蕎麦

柿

さきにけるく人ちひさくもみゆるかなこの川柿
の長さしらんと

冬日

冬じかりと思ふ心に冬の日はなかくものゝはかどりにけり

蕎麦刈

なかくに風の吹えるはしとをおつるこの九
の音はきこゆる

横原製

夏杉

さしかはる杉のわか葉に山里の板あれとしく
えゆるころかな

鬼鐘

人しげき都の市にきこゆとにさびしきあを入
あのか鐘

旅思

ゆく所わか国なれら旅にあれば都おもはゆ
ときなのりけり

霜夜半鐘

霜ふゝて撞くらむ人の寒さゝ思ひやらる
鐘のおとかな

楽

心あるべのいさめのことのはは為るき身の楽なりけり

花に言ふ志

ちかいらばわが庭さくら北支那のいとあるに折りてやらまし

旅夕

あとさきに人をともなはなからくもあく道のさびしかりけり

庭

なかくれのやびすまゝるもあまるれも作りすぎれる庭のけしきに

横原製

一天万乗の御製歌は沼勅なるものゝ如く、堂々たる調の高きに、何人も微々難いものがある。元寿八年つゝ北の冊子と抄録したことも有るが、ここの抽録の十数首は、歌人としての陛下の御技倆を見んとして、あらゆる世の万物を文藻を商ませらるゝことがどの御歌をあ後ともうるべかゝ。

○鞍三樹の清積三葉を示すあるに、唐紙の反故裏に集葉と書き、作者の志士馬場文英の遺品と云へ、四季奉迎の馬場と旅宿とを回想して古きなるものが、侍女鞍八九、往々侍婢を示すものあり、文一つ春井竹の廿八家清て序

し等類推の作歌あり、たゞ二三を挙ず

夢西

風味蕭然三径晚、書懷依約無蘭畹、大笑
抽唐清夢覺、眼中一點青山遠、花色滿
喉秋味香、今日共嘗菊酒

懷新橋芳秋湖

後先り寒自為情、清秋鉾長竹離離、七州
秋色酣夕照、風舞蜻蛉飛後、白鷺翔
北湖媛波十年忽隔滄雲數、最憐幾作
停杯興、金波橋下清秋

○又閑に乗じて四海天皇御集を読む、国民を
風化に思ひたまふ、御歌出征軍人の苦労を慰ま

せ給ふ御歌は最も震雷を聞くものなり

「折るふんどし」の歌下の句が自己を卑下し
くある。自分は殊に陛下が自己を卑下し給ふ御歌味
はひ深く、特に北海道に注意し給ふ前も聖の御
親しみが、今亦左の二十首ばかりを拝誦する。陛
下が大自然の偉大さを深く感ぜられ給ふ折の御感懷の際
ありつゝ、御詠りとそも深き御心の表れなり
そんが家人と無きことを嘆き給ふ折の歌
深き感慨やいふせき戦の伏屋にお用をとめさ
んかを推し量りて恐懼に堪へざるものがある。
お歌の後尚も無数にものかはるが、感吟すべきあ
かりかくまる。

深山木

しく雲のはるまを柿のもみぢおく山の老木ちらぬも苔むしにけり

鳥

うちつれて海をみわたす鳥ぶ鳥もおもいくの友ぞあるらし

山家雲

白雲の軒端にまよふ山里は雨降ぬ日もうちしめるらむ

鶏

人ふみる野にいではもしづが屋のひとりのこりし

榛原製

はちの音

鐘聲何方

あきまよふ風のまぎれも来る西をわかぬ鐘の音かな

時雨一聲

あしひきの山時雨ふる聲とそ心ぶかくもあるかな

夏草

かたはらに戦ふうるおい夏草をかるしづのめがうまごうるらむ

氷

くみあげし手のけぶりも消えぬまに つるべの雫はこ

やこまりけり

海雁

なきさやく船のあるるもらさじ おきべ(亀)にうちま
もるまは

雨

みなもとはほしすめるを濁江におちいるあのもし
くもるかな

旅店雨

草枕心のやどりき着きて後うんーく雨はふる山
にけり

夏夢

山かげの清水むすぶとみし夢はこめの後の水

榛原製

しかりけり

朝顔

夕月の影さかぎへし答らく多く咲きけり朝がほ
の花

露や朝顔

露露のなびくかぎ朝顔の蔓尺えそめる枝へ
ぬけにけり

木槿

あきの空の千ぐさの色の衰をあらそふうつ
ぎをうくさる

行路夏草

夏草のしげきをみんばあらとよいいまぐひらけぬ

造もあつけり

日家朝魚

なつ〜に色こそよけれつくろいあしづが垣根の

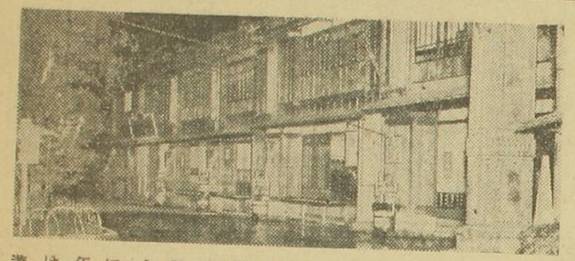
朝顔のはな

○朝倉文夫大仏像を心る古変権を握つてゐるかの如くあるの観合比人が擁南する、紫花料の高いのも亦一特徴で、著名(三萬圓、分蔵者の仏像)係ハ七萬圓と云ふ、人うが早稲田で心るグロン然の大隈前伯の仏像ハ老年第四と云ふが、こんな破格の寄附の値段の値を徴するから工作も大規模で、製作も神速(三年)ぶの

榛原製

である。世界ゐる稀んゐる大規模ハ仏像所れと誰れやらが云ふた。家も切論商人である。此人の道楽ハ無絵釣魚で、種々の経験もある様子だが、あの人ハ釣り方を四段る分つて大名釣、侍釣、非人釣、狂人釣と云ふ。大名釣ハ切論贅沢の釣り方で舟を浮べて酒肴を持ちこみ、私を挙げちこまる魚の竿に鯛〜を待つと云ふ仕り方である。侍釣ハ国産を表に数本の竿を揃ぬる、非人釣ハ竿を霞つて天平をあちらこちら動いて釣るを云ひ、狂人釣ハ餌のない釣を矢鱈に動かして釣るのを云ふとか、浦本人ハどの際釣る居するかと云ふと、大名釣ひ、そんが為に立派るボー

昭和七年六月二十九日　（第三種郵便物認可）



江戸の華、吉原遊廓
遂に轉身の運命

不況と時代の波に押されて
公娼から私娼へ

廓といへば江戸の吉原、京の島原と並び稱された華やかなりし大江戸の傳統を唯一のたよりに吉原は今日まで命脈を繋げて來た、ハラキリ、フジヤマ、ゲイシヤガールと共にヨシワラの名は外國人の間にまで知られてゐる、明治三年の大火以來日本橋から淺草日本堤に移されて淺草現在の繁榮を築いた吉原も押し寄せる時代の潮流と不況の大波と廿數年間にわたる不斷の例の**廢娼運動等々の時代的大勢に押し流されて遂に三百年の傳統をかなぐり捨て、公娼から私娼へ、**貸座敷から飲食店へ著るしい轉向が目下具體化されつゝある、廓から一轉して戸、玉ノ井と同じ樣な集團的銘酒屋にならうといふのである、吉原百余軒の妓樓は隅川から明治、大正、昭和と今日まで天下御免の公娼として續いて來たものの**近年の不況と新時代の遊興機關續出に押され、**どの妓樓も各足が非常に少なく、しかも反面には公娼なればこそ秘の貢獻は大きいし、その上に娼妓の自由廢業は合法、非合法を問はず頻發する、廢娼運動に黙殺する廢娼防止運動費だけでも年年數萬圓を要するといふ始末に傳統を抱いて誇りとしてゐた吉原もホトヽ疲れ果て同三業組合有志は、遂に公娼廢止運動の闘士聖高二郎代議士と協議目下その具體案につき考究中である【寫眞は吉原遊廓】

トが武藏ようの迄のかるのを検する笠の紙金
ス鈴ひちけんバ卿者きかるいとあうて金拾を用
ひてみるるもの敷沒釣をやつもぬるそうど

標原製

榛原製

以下
5丁
白紙

閲覧室

榛原製